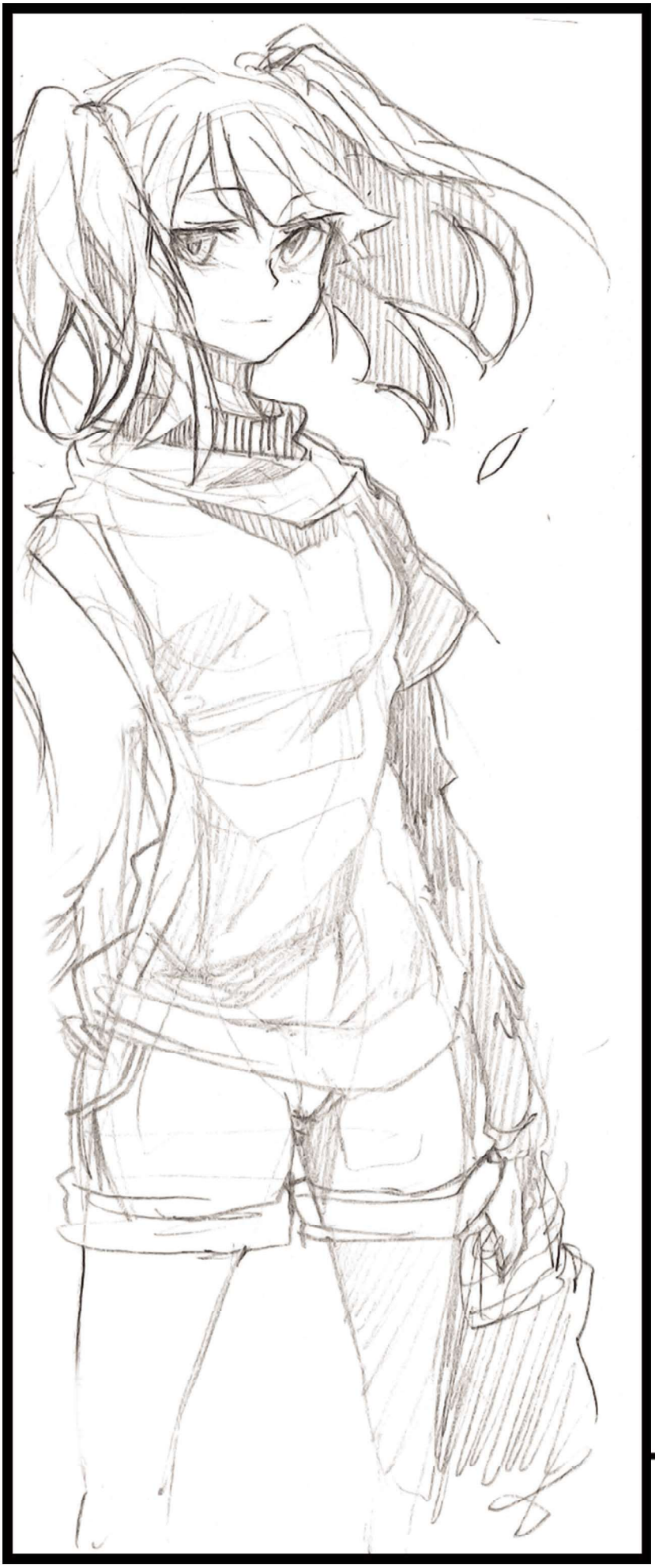

# TRACK 1

## Common People

You'll never live like common people....

# Track.1　Piannoman

「こんにちは」
ドアを開けて入ると、馴染みの女が座っていた。
彼女は突然の来訪にも動じず、作業していた手を止めて俺に笑いかけてきた。
「あら、久しぶり。こんにちは」
俺の適当な挨拶にも彼女は真面目に答えてくれる。
―しかし。
悪いが俺は今すぐにでも帰りたい気分だ。ここにはあまり長居したくない。別に、彼女とは今までも二人で会っているし、お互いに気心が知れている仲だ。とはいっても別に恋人とか特別な関係ということもない。ただの友人の知り合い、友人の友人という程度だろうか。友人といっても彼女の方が遙かに年上なのだが。
俺が黙って考え事をしていると、目の前から視線を感じた。
「なんだよ」
「いや、ここに君が来るのは本当に久しぶりだと思ってね。何か飲む？　コーヒーかコーラか」

どうやら先生もぎこちない雰囲気を感じたのか、当たり障りのない会話を切り出してきた。
俺もどこか居たたまれなくなり、自ら冷蔵庫の中を物色し始める。
「あ、そっちは子供たちのだからダメよ」
まるで手を叩かれたかのように一蹴された。
くそっ、俺だってスポーツドリンクが飲みたかった。けど子供たちのって言われたら仕方ないか。
「……じゃあコーヒーで」

今更だが、ここは幼稚園だ。そして俺が【先生】と呼んでいる彼女は幼稚園の先生。居住スペースと併設しているらしい。ちなみに運営はそこそこ上々のようだ。この辺はマンションが多いのに幼稚園は少ないから、そのおかげだろう。運のいいこった。

「それで？　今日は何の用かしら？　用も無しに来るわけないわよね。君はここがあまり好きではないみたいだし。第一、あの事件以来ここには絶対来ないって言ってたと思うんだけど？」
「何回か、用事がある時は来ている。偶々そっちが忙しくて俺と会えなかっただけだろ」
「あら、そうだったの？　でも、まあ。君はここが嫌いだと思っていたから……勘違いで良かったわ」
そういって先生は俺に優しく微笑みかけてくれた。

全く。そんな顔をされると何も言えないじゃないか。
「俺は……普通に生きたかったんだ。それなのに、ここは全然普通じゃない」
「え？　何でよ。ここは至って普通の幼稚園よ。そして私はここの園長先生」
当然のことのように胸を張って答えるが、この女は本当に普通ではない。

そう、彼女は人間ではない。
【魔法使い】。そういう類のものだ。周りからは恐れられて【魔女】とか言われて、避けられているが俺にはあまり理解できない。高校時代に結構世話になり、彼女のおかげで卒業もできたという恩もあるが、それ以前に【ただの物好きな園長先生】。それが彼女の印象だからだ。それにしても魔法使いって……使っているのは魔法と言うよりも超能力みたいなものなのだから、いっそのこと【超能力者】って名乗ればいいのに。

相変わらず、先生は俺の方を見てニヤついている。勘弁してくれ。
「今日は葵の頼みごとで来ただけだから、厄介事には巻き込まないでくれよ。全く。あいつ……面倒なことばっかり俺に押しつけやがって」
「面倒なら、面倒ですって本人にそう言い返せばいいのに」
「葵のやつ……今テスト期間だから」
普段は授業にすら出てないくせに、テスト期間にだけこっそりと顔を出す奴だ。いや、もしかしたら俺が気付いていないだけで出席もちゃんとしているのかもしれない。
「あなたは？　一緒の学校なんだからテスト期間も同じじゃないの？」

「ああ、俺はもう終わった。だからこうやって来ているんだ」

俺はあいつと違って、前々から準備していたのでテストも特に問題はなかった。そう、今日はやっとテストが終わり、仕事もなく、ちょうど暇だったので来ただけだ。運がいいのか、悪いのか。わからないな。

「とにかく、俺は葵の頼みごとで来ただけだ。何か渡すものがあるんだろ、早くくれ」

そしてさっさと家に帰って休もう。これ以上ここにいたら、さらに面倒事に巻き込まれそうだ。そんなもの三年前のあの事件だけで充分。

「まあ、まあ。そんなに急がなくても。奏ちゃんにも顔見せて来なさいよ」

「ん？ ああ、奏か。って、今は学校じゃないのか」

「あの子は小学生よ。もう授業は終わってるし、塾もないんだからそろそろ帰ってくるでしょ」

奏はこの女と一緒に暮らしている小学生の女の子だ。三年前の事件以来、拠り所がなくなった彼女を連れてきたのがこの先生。それ以来、奏の面倒を見ている。養女というものだろうか。実際は飯炊き係のようなものだが。この女は相当怠け者だからな……奏、強く生きてくれ。いつか俺が絶対にここから救い出してあげるからな。

「奏は元気なのか？ しばらく会えてないけど」

会えてない……正確には俺があまりここに来ていないから、会いに行かなかったという方が正しいが。

「もちろん元気よ。無口なところは相変わらずだけど。友達もできたみたいだし。でも私に迷惑って思っているのか全然家に連れてこないんだけどね。あ、そうそう、あの子すごく勉強できるのよ」
こういうのを親ばかというのか。
「元気にしてるなら何よりだ。ま、奏ならどこに行っても大丈夫な気がするな。ところでリニアは？」
ふと、頭に浮かんだ人物について尋ねる。リニアの方とはあの事件以来、一度も会えていないのだ。
「リニアか……」
先生は顔を顰めたまま押し黙ってしまった
「二番目の弟子のことだよ。リニア・イベリン。覚えてないか？ いや、覚えてないわけないだろ」
「……」

一呼吸おくと、先生は大きな欠伸をしながら答えた。
「覚えてないとは言ってない。実はあれ以来、私もリニアとは連絡が取れなくなっているんだ。ドバイに行ったとは人伝手に聞いたけど、それ以外は何もわからない。ま、元気にやってるでしょ。そもそもあの子がどこかで苦労してるとは思えないし。弟子入り前にも、あの子はハンス・ブリーゲルから色々教えてもらってたんだから平気よ。余裕ができたらその内ひょっこり帰ってくるんじゃない？」

俺は、そっと溜息をつく。先生もこの話題は落ち着かないのか、何度も冷蔵庫を行ったり来たりしていた。おかげでテーブルの上にはブドウ味の炭酸飲料の缶が山になっている。先生は昔からこの飲み物が特に好きらしい。

互いに何も言わず缶の山を消費していく。
しばらくすると、いつのまにか俺たちは無駄話をしていた。教授がうるさいだとか、授業が退屈だとか、親御さんの文句が多いだとか。苦手な相手だとしても、こういう会話はストレス発散になるようだ。きっと俺もテスト終わりの疲れが溜まっていたのだろう。誰でもいいから会話をしたかったのだ。

ふと、時計を見るとだいぶ時間が経っていたが、未だに奏が現れる気配はしない。
「奏はどこか行っているのか？ 学校はもう終わってるんだろ？」
すると先生の口からとんでもない言葉が出てきた。
「奏ちゃんなら夕食の買い物に行っているんじゃない？ 大きな鞄もって」
先生は両手を広げて鞄の大きさをアピールする。
本当に情けないな。
「子供にそんなことさせるなよ。重くて持って帰るのも大変だろうが」
すると、今度はもっと情けない返事が返ってきた。
「だって私、買い物なんてできないもん。私が行ったら余計なものばかり買ってくるよ？」

偉そうに言いやがって……いったい何ができるんだ、この女は。

「変わんないな、このお姫様は」
「何言ってるの、私は働く主婦だよ？」
皮肉を言ってみても先生は堂々とウィンクを返してきた。
「結婚もしてないのに主婦かよ」
「だって私、子供いるじゃん」
その子供が飯の準備をしているんだがな。
先生には何を言おうが同じことの繰り返しになりそうだ。

――ガチャ

ドアを開ける音が俺の背後でした。小さな足音が聞こえる。自分の家なのに常にあんな感じなのだろうか。下駄箱の閉じる音が聞こえたと思ったら、職員室にちょこんと顔だけが現れた。奏だ。ガキの頃から見ていたのに、もうこんなに大きくなったのか。久しぶりに会うと本当に喜ばしい。
ふと、奏と目が合った。ちょっとびっくりした様子だったが、奏は直ぐに元の表情に戻った。
「久しぶりだな、元気だったか？」
「うん」

「それはよかった。大きくなったな、もう五年生か？」
「うん」
「夕飯の買い物って何買ったんだ？」
「いろいろ」
「そっか」
「うん」
奏は無口だ。先生に聞いた話では三年前の事件の後、失語症にかかったらしい。治った今でもあまり喋らないそうだ。俺が奏に会ったのはその頃だ。
「さて。奏ちゃんも帰ってきたことだし、ご飯にしましょ。テストがあったなら何も食べてないでしょ？」
ちらりと奏の表情を伺うが、別に嫌ではないようだ。でも、悪いな、奏。俺は一刻も早くこの部屋から立ち去りたいんだ。たぶん俺は、まだこの場所が居心地悪いんだろう。
先生の誘いを丁重にお断りし、俺は玄関へと向かう。
「じゃあね。またいつでも来て。待ってるわ」
「また来たくないし、待たなくてもいいよ」
すると、先生はしかめ面な顔を寄せてきた。
「また、その話。ここはそんなに怖いところじゃないってば。気負いすぎじゃない？　あれから時間も結構経っているんだし、昔のような事件はもう起こらないわ」
「……ああ」

―それでもここには来たくないんだ。

自分でも切り替えようとは思っているが、どうしてもここに来ると不安な気持ちになってしまう。

先生との会話を適当に済ませて俺は奏の方へと向き直った。

「じゃ、奏。またな」

奏が小さく頷くのを見届けてから、俺は幼稚園を後にした。

冷たい風が肌に染み入る。辺りはすでに日が落ちていた。誰もいない通りを一人歩いていると、どこか感傷的な気分になってくる。

＊＊＊

三年前、世界に危機がやってきた。世界の危機なんていうと、それは俺たち一般人の知らないところで勝手に起こって勝手に解決するものだろう。

でも違った。当時、高校生だった俺はなぜかその世界の危機というのを知ってしまい、更にはそれを解決する力を持っていたのだ。

全く馬鹿馬鹿しい。でも、俺だって最初は好奇心もあった。俺には仲間がいてあいつらと共に、ヒーローにでもなった気分で世界を救った。

―けれども、その翌日あいつは死んでしまった。
最初は自殺だと思われていたが、後々それが他殺だとわかった。俺は一生懸命、手がかりを追ったけど、結局犯人はわからなかった。あの事件のせいで葵も変わってしまった。ひどい結末だ。世界の危機を救う代わりに、俺は仲間の死と親友の変化という代償を背負ったのだ。
それでも世界は何もなかったかのように過ぎ去っていく。
――俺は何のために世界を救ったのだろう。

「あ」
考え事をしながら歩いていると大事なことを思い出した。
「葵の頼みごと、もらってくんの忘れてた!!」
仕方ない、また幼稚園に戻るか。

***

「こ……こんにちは」
俺は再び幼稚園のドアを開いた。廊下には馴染みの女が満面の笑みで立っていた。
「あら、久しぶり。こんにちは」
さっきと同じ反応だ。またここに戻ってくることを知っていたのだろう。さすが魔女。こ

の女には適わないな。
「さっき会ったばっかりだろ。久しぶりって何だ」
「あれ、そうだっけ」
「さあな」
本当に疲れる。
深いため息をつくと、彼女は俺の肩を叩いてキッチンの方を指差した。
「ご飯、食べに来たんでしょ？ さっきは、ごめんなさいって帰っちゃったけど、やっぱり食べたくなったの？」
この女、わざとだ。絶対わざとだ。馬鹿にされている気がする。
「そうじゃなくて、葵の頼みごと。貰うの忘れてそのまま帰っちまったんだよ」
「あ、そっかそっか。そうだったね」
先生は目を丸くして、頭を掻きながらゆっくりと職員室へ歩いていった。

「はい」
ぽんっと手に乗せられたのは、お花や動物がプリントされた派手な封筒。このデザイン……幼稚園だからか？ それともこの人の好みだろうか。
「だっせえ」
「そう？ 結構かわいくない？」
俺の反応が気に入らないのか彼女は口を尖らせている。

「……じゃあな」
これで本当に用事は終った。帰ろう。
と思いきや、ドアノブに伸ばしたはずの俺の腕が止まった。
「……」
「あなた一人暮らしでしょ。食費も減らせるわよ」
食費。確かに腹も減っている。どうしようか。
俺が考えあぐねていると、突然くいっと何かが俺の裾を引っ張った。
「ごはん、たべてくの？」
じっと奏が俺を見上げていた。
……これは断れないな。
俺はおとなしく奏の後ろをついてキッチンへと向かった。

今日のメニューは器とスプーンと箸と……って違う。この急展開に頭がついていってないようだ。とりあえず俺は、奏に渡されたものをどんどんテーブルの上においていった。
どうやら今晩のご飯は鍋のようだ。

そして奏がキッチンから大きな鍋を慎重に運んできた。見ているだけで、とても心配になってくる。
「いただきます」
結局、三人で仲良く鍋を囲んでいた。

「うまい……」
奏の作った鍋は中々の出来で、正直本当に小学生か疑うレベルだった。
「―って、魔法使いがこんな生活してていいのかよ」
あまりにも普通すぎる。
「じゃあ、逆にどう過ごせばいいのよ」
「そうだな。なんか、こうバーンとかっこよく魔法を使って……」
箸を置いて、宙に文字を描く仕草をしてみると、彼女はくすくすと笑っていた。
「それって、つまり。どこかの機関に捕まって、実験されている施設から逃亡とかする感じ？」
「いや、そういうんじゃなくて!!」
俺は慌てて水を含んだ後、必死に否定した。
「どうして魔法使いがこんな不便な生活をしているのかってことだよ。もっと楽な生活ができるんじゃないのか」
彼女は苦笑を浮かべていたが、箸だけは進んでいた。
そして鍋の肉を食べながら、考え事をしていた彼女はやっと口を開いた。
「今の時代、魔法使いなんて必要なくなってしまったのよ。こんなものは、せいぜい飾り程度。それくらいに過ぎない。魔法使いなんて称号、人生で何の役にも立たなくなってしまったし、第一、魔法なんかより今は銃弾一発の方がずっと強いじゃない」
それはそうだが。
「それに」

にやりと口の端を上げた彼女は、箸で俺を指さしてきた。
「魔法では稼げないでしょ」
「確かに。魔法でお金が作れるわけでもないしな」
正論すぎて何も言えない。
「だから、これぐらいがちょうどいいのよ。働いてお金稼いで普通に過ごせればそれで充分。今更あなたに、『世界の平和を守れ』なんて言う人いないんだから、あなたも普通に学校に通って、卒業して、普通に生きればいいのよ」

―違う。俺はこんな話がしたくて言い出したわけではないのに。

沈黙。食器の音しかしない。
「奏ちゃん、おかわり」
彼女から器を受け取ると、奏は慣れた手つきでご飯をよそった。普通の生活か。普通なら、子供が飯の準備することなんてないんだけどな。でも、まあ、奏の料理の腕前を目の当たりにしてしまうと、任せてしまう気持ちもわからなくもない。
「うまいな」
「でしょ」
「ありがとう」
「どういたしまして。遠慮しないで、いっぱい食べて」
「あんたじゃない。奏に言ってんだ」

すると、奏がチラリとこちらを見た。
「料理上手なんだな、びっくりした。まだ五年生なのにすごいな、また奏の料理食べたいよ」
「……」
奏の返事はなかったが、多分喜んでいる気がする。
「ごちそうさま」
スープを飲み干して一息ついた頃、再び奏が俺の服の裾を引っ張った。
「……明日も食べに来ていいよ」
「そっか。ならお言葉に甘えて」
自然と口にしていた。あれだけここに来ることを嫌がってたのに、今はほんの少し心が軽い。ずっと抱いていた緊張感がほぐれたような感じだ。

「何ニヤニヤしてんだよ」
奏との会話の最中、ずっと先生は気色悪い笑顔を浮かべていた。
「何って。楽しいから。あ、あなた明日も来てね」
……なんだか、この女に言われるのは嫌だな。

こうして夜が更けていく。
誰かと一緒に夕飯を食べたのは久しぶりだった。

たまにはこんな夜も悪くないか。

＊＊＊

数日が過ぎた。学校へ行くと、普段見掛けなかったあいつが、久しぶりにやってきた。いつもなら近況を聞いたり、彼女でもできたかなどと冗談を言い合ったりするが、今日は挨拶だけで特別な会話はしなかった。

「試験受けたのか？」

「ああ……まあ」

葵は軽く言葉を濁しながら答えを回避する。あんな風に反応するということはあまり試験については触れられたくないようだ。良く考えれば、いや良く考えなくとも、いつも授業に出ていない人間が試験を受けて点を取れるわけないか。俺は思わず苦笑してしまった。

「そっか、そっかー」

「う……」

俺にからかわれることはわかっていたはずだろうに。

葵は苦々しい表情で俺から視線を外した。いくらこいつがマイペースだといっても、定期試験を台無しにしてしまっては多少なりともショックがあるのだろう。学生にとって最も大切なものは単位である。それを全部逃してしまった奴の顔には、嬉しさとは真逆のものしかなかった。

「それは、それは残念だな」

「……からかうなら他の場所でやってくれ、疲れるから」
もう俺にいじられることに飽き飽きしたのか、葵は顔をしかめながら拒絶する。
涼やかな風がそよそよと吹いた。ふと空を見上げると、綺麗な青空が広がっている。どうやらこの季節もそろそろ終わるらしい。
ただただ無意味な会話が流れる。雑談。友達同士の軽い冗談、そこには互いの私生活に関することは一切話さない。しかし、彼とは中学時代からの付き合いである。
「最近もいたずらしてるのか」
「いたずらって？」
「高校時代に色々したじゃないか」
「あー」
高校時代、俺たちの学校はかなり厳しかった。
例えば、『ひとたび何か起こると、問題が解決するまで全生徒の活動をやめさせる』など、あらゆる厳格な校則の下、性能のいい子供を大量に生産するのが学校の方針だった。しかし、そのような学校でも唯一の欠点がある。それは俺たちのような問題児が、一人や二人必ず出てくるという点だ。認めたくないが、俺と葵が仲が良くなったのは運命のようなものだったのかもしれない。
実は葵も魔法使いであり、生まれた時から能力を持っていたという。遠くにあるものを引き寄せたり捕まえることができる力だ。あいつはその能力をいたずらに使っていた。問題を解決できず、先生の手が出そうになった時、あいつは宙に手を伸ばして空気を掴み、そ

のまま先生の後頭部に勢いよく投げつけた。空気といえども、その威力は絶大で先生は気絶してしまう。このような度を超えたいたずらのおかげか、先生たちは疲れ切ってしまい、学校を休む先生が増えていったという噂まである。更に驚くべきことは、あいつの周りの友達はその能力のことを全部知っていたのだ。それにも拘わらず、彼らは葵を気味悪く思うこともなく普通に接していたようである。今思うと、俺たちはなんとも素敵な学校生活を送っていたな。

さて、本題へ移るとするか。俺は鞄の中にずっとしまっていたそれを取り出した。先日、先生からもらった書類だ。こいつがあまりにも神出鬼没だったため、会えることも伝えることもできなかったのである。

「ほら。直接行ってもらって来たんだ。失くすなよ」

「ありがとな。行きたくなかったはずなのにお疲れ」

「別に。夕飯もご馳走になってきたから」

「へえ」

葵は驚いた表情で俺を見ていた。まあ、そうだろうな。俺だって自分に驚いた。

彼は再び封筒に目をやり、また俺の方を見返す。

「これ、中に何があるのか気になったんじゃないか？ 俺なら、好奇心で見るけど」

葵が、すっとその華やかな書類を突き出してきたので、俺はすぐに目をそらした。

「俺は見たくない」

「ふーん。なんで？」

意外そうな顔をしながら葵は聞き返してきた。
「何が入っているのかもわからないし、開けたって得しそうにない。それに余計な事を思い出したくもないからな……大体、そんな封筒の時点で受け取りたくもなかったさ」
そういうと、葵はこれ以上、追求することなくその封筒を鞄の中へとしまった。
「なあ鈴木、この後授業ある？」
「三限と四限」
「そっか」
どちらからともなく、俺たちは揃ってベンチに腰掛けた。特に会話をすることなく、ただ呆然と校内を眺めている。雑音の中の静寂。時がゆっくりと流れていくようだ。授業へと急ぐ生徒、楽しそうにおしゃべりをしながら帰る生徒、大きな鞄を背負いながら歩く教授。まるで映画館に映し出されたスクリーンを見ているようである。

―ああ、何も起こらない平和な日々だ。

ふと隣を見ると、葵は少し空腹に負けているのか、時計を見ていた。俺もつられて時計を見る。まだ昼休みが終わるまでかなり時間が残っていた。俺の視線の先に気付いたのか、葵は満面の笑みを向けてきた。
「鈴木、お腹空いてないか？　何か食べに行こうぜ」
彼の瞳から嫌な予感がする。
「……割り勘なら」

「そうそう君のおごり」
おい、それは割り勘じゃないだろ。

＊＊＊

ぼんやりと授業を聞く。教授の言葉が耳に入らない。それでも俺は無意識に、重要そうな部分だけはノートに書き写していた。試験の恐怖故だろう。親のお金で大学に通わせてもらっているため、最低限のことはするつもりだ。
ふと、先日のことを回想する。半ば強制的だったが、三人揃って落ち着いた雰囲気の中で夕食を食べた、あの日のことを。
先生自体は元々嫌いではない。ただ俺のトラウマのせいであそこには近づきたくなかっただけだ。今は……まあ以前よりは、ほんの少し気持ちが軽くなった気がする。また誘われたら、俺は何だかんだ言いながらも行くのだろう。

「このような状況では、消費者は……」
いつのまにか講義が終盤に向かっている。この教授、最初から最後までトーンが一定である。すごい。
「では、この問題を……前列で三番目の学生」
誰だか知らないが、不幸だな。そう思い、ため息をつくと教授が俺の目の前に立っていた。

「君だね」
……くそ。

入学した当初、俺はサークルや学科の集まりのようなものは、存在こそ知っていたものの全く入る気は起きなかった。今になって思えば、適当に参加して狂ったように遊びまくっていたら、色んなことを忘れたまま過ごすことができたのかもしれない。残念といえば残念だった。とはいえ、おかげで俺は一人の時間が以前より増え、アルバイトや勉強に多くの時間を充てることができるようになった。

そして、現在。大学生活も一年と半年が経った。俺は何も変わっていない。葵でさえ向こうの仕事を手伝い、二度と三年前の悲劇が起こらないよう努力しているというのに。俺は、何をすればいいのかもわからないままだ。

本当に俺は17歳から何も成長していないのかもしれない。このまま無意味に過ごしていてもいいのか。

「放送でお知らせします、今回の曲は……」

聞き覚えのあるメロディに思考が停止する。

「なんだっけ、この曲？」

「さあ」

『Top Of The World』だな。

目の前を過ぎていったカップルのうち、男の方が途方に暮れたような表情をした。まだ恋愛初期か。俺は歌詞を脳内で追いながら帰り道についた。

***

「魔法使い!? すげえな!!」
「別に凄いこともない」
「なあ、他にはないのか？ 火とか水、出したりするやつ」
「そんなものないよ。俺にできることはこれだけだ」
「何だ、それじゃ偽物じゃないか」
「何だと？」
「はいはい、二人とも。ほら、今日はここまでにしてそろそろ帰ろうよ」
「……うるさいな、大体何でお前がいるんだよ。他の女子と遊べばいいのに、毎日毎日ついてきやがって」
「何でって……子供の頃からずっと一緒に遊んでいるからじゃない？」
「別にそんな小さい頃からでもないだろ。中学からの付き合いじゃないか」
「そうだっけ？」

＊＊＊

つまらない夢。久しぶりだな。あいつが夢の中に出てくるのは。ここ一年ちっとも出てこないから、もう見ないと思っていたのに。全く、生きていた頃もだが、死んでからもしつこい奴だ。

家に着いた途端、とりあえず横になっていたのだが、どうやら寝落ちしてしまったみたいだ。外をのぞく限りまだ夕方か。

深く深呼吸をしてから、俺は起き上がった。

「……部屋の掃除でもするか」

このままじっとしていたら、何かに押しつぶされそうな気がした。

＊＊＊

午後九時。だいぶ遅い時間帯だが、俺は他人の家の前にいる。

「こんばんは」

ドアを開けて入ると、そこには見覚えのある女性が座っていた。先生はちらりとこちらを一瞥したが、仕事の手を止めることはなかった。俺も気にすることなく部屋に上がるが、彼女は何も歓迎をしないのは良くないと思い直したのか、申し訳程度の笑顔を向けてきた。

「あら、今日は反対ね」

「ああ、鈴木はここに来ることが嫌いだからな」

すると先生は肩をすくめて、否定するような動作をした。
「それにしてはこの間は楽しく遊んで帰ったけど」
「本人が嫌だと思っているんだから、そう信じなくちゃ」
「それも、そうね」
俺は迷うことなく手前のソファに腰かける。遅れて彼女は一人分のカップを手にして入ってきた。いつもと同じ香りがする。おなじみの紅茶だ。カップを俺の前に置き、彼女はお気に入りの缶ジュースを自身の前に置いた。
「仕事はどうだった？」
「ああ、なんとか。最初はちょっと大変だったけど、実際にやってみたら楽だったよ」
「そう、それならよかったわ」
「良かったといえば良かったのか？　まあ、おかげで学校の試験の方はダメみたいだけど」
俺が苦笑いを浮かべて答えると、先生はジュースを飲みながら素っ気ない口調で答えた。
「それはそちらの事情、私には関係ないわ。私たちはそういう関係でしょ」
「……魔女だな」
俺は軽く挑発してみるが、彼女は平然としていた。
「もともと魔女よ」
静寂。
それでも空気だけは張り詰めていた。
「最近、なんかあった？」
「ああ、まあそっちはなんとか……」

世間話に慣れてないのか、彼女はあいまいな返事をする。
「……いつも俺たちの会話はこんなだな」
「まあ互いの接点となる話題がないからね」
「それもそうだな」
またしても静寂。彼女が二本目を開ける音だけがしていた。
「他のやつらはどうしてるんだ？」
「他のやつら？　誰のこと？」
彼女は心当たりがないのか疑問を示している。
「リニアは元気にしているだろうが、赤城と幽遊は？」
やっと見当がいったのか、二人の名前が出ると、彼女はすぐに嬉しそうな顔で話し出した。
「ああ、元気よ。幽遊の方がいつも振り回してるけど、そこがあのカップルの魅力だからね」
「そっか。特にそっちは動きがないんだな」
「今になって研究所や協会が動く理由はないからね」
「たしかにな」
会話が飛び交うことで、先ほどの冷たい空気が緩んでいくように思える。そして俺が紅茶を飲み終えると、目の前に優しい微笑みがあった。
「……何？」
「考えてみると、かなり忙しい一年半だったなーってね」
「そうか？」

「あれこれと走り回っていたからね。あなただって、二度とあんなことが起きないようにって必死だったじゃない」
この女にそんな風に言われると、むず痒くなってくる。俺は急いで話題を変えた。
「そういえば、安月給でこんな大変なバイトも珍しいな」
「いつか給料上げるから心配しないで大丈夫よ」
「ふーん」
再び静寂。話題の区切りが見えるようだ。何も言わずに、じっとカップに残った紅茶の跡を眺めていると、俺はいつもエプロンをしている少女の顔を思い出した。
「そういえば、奏は？」
「ああ、寝ている」
「九時に？ 早いな」
「ああ見えても、小学生だし、優等生だからね」
「誰かさんとは正反対だな」

さて、もういいだろ。そろそろ本題に入るか。
「……何かあったみたいね」
俺の考えが伝わったのか、彼女の顔も張り詰めた表情に変わる。それを見て、つい俺は薄ら笑いを浮かべてしまった。そして、俺はゆっくりと胸のポケットから、小さな布が入った透明のビニールを取り出した。
「これ何だと思う？」

「さあ」
「三年前に俺達が着ていた制服の一部だ。仕事を処理していたら近くに落ちていた」
「あら」
「密かに動いてるみたいだ。性懲りもなく」
「挑発していると？」
「たぶんな」
彼女はビニールを手に取り、じっくりと眺めていた。
「色からして……女もの。確かにこれは見過ごせないわね」
「ああ」
「それにしては、私たちだいぶ落ちついてるけど」
「今更何を」
三本目に彼女は手を伸ばした。俺も二杯目をもらうためにキッチンへと向かう。

「俺一人で処理しなければならないのか？」
「さあ」
再びソファに腰を落ち着け会話を続ける。彼女の表情は先ほどより緩んでいた。俺が思っている程、彼女はこの件を気に留めていないようで少し腹立たしくなってくる。
「単なる偶然である可能性もあるが、しばらくは緊張しなければならないと思うけど」
「まあ、それもそうだが。向こうもこちらに私がいるのを分かっていて、こんなことする馬鹿もいないでしょう」

「戦いを覚悟しての挑発になるからな」
「そしたら鈴木くんはどうするつもり？」
その内彼女があいつの名前を出すとは思っていたが、いざ出されると困る。
「……どうすれば良いかわからない」
「ならほっといてあげなさい」
「これは置いて行く。探索はそっちが専門だからな」
「わかったわ、やってみる」
「ありがとう、じゃあ俺はもう帰るから」
俺は玄関の方へと向き直った。
「さようなら」
彼女は軽く手を振りながら見送ってくれた。
「さようなら」

***

「I've been where you are before。No one understands it more。You fear every step you take ……何だっけ？」
テーブルを挟んで向かいに座っている奴に訊ねると、すぐに答えが返ってきた。
「So sure that your heart will break。It's not how the story ends」

数分前。日付が変わるまで残り二、三時間という時に俺の家のチャイムが鳴った。
覗き穴に見えたのは葵だった。いつもなら追い返していたが、今日は夢見が悪かったせいもあり、気分を紛らわすにはちょうど良かったのだ。
「よく覚えてるな？」
「うんざりするほど聞いたからな」
当時のことは全部覚えているが、俺は暇つぶしにそのまま会話を続けた。
「それ、いつ頃だっけ？」
葵は歌うのをやめて、静かに答えた。
「高校二年の頃だろ。その前にこの曲はあっただろうけど」
俺はぼんやりと、その時のことを思い出した。
「とんびのやつ、一緒に歌えるようにって最後まで覚えさせたな」
葵も俺と同じように昔のことを思い出しているのだろうか。彼は普段めったに目にすることのない穏やかな顔を浮かべている。
「ああ……そうだった。懐かしいな、あいつは面白い奴だった」
そういえば、こいつこんな時間に訊ねてきたが、今まで何してたんだ。
「どっか行って来たのか？」
「まぁ、色々とな」
見事にはぐらかされてしまったが、俺もそこまで気になっているわけでもないからいいか。
「……お酒でも飲もうかな」
ぽつりと葵がこぼした。こいつがそんなことを言うなんて初めてだ。乗らない理由がない。

「そうだな、そうしよう。ところで酒は誰が買うんだ？」
「ええと……割り勘？」
「……こんな時こそ割り勘か」

＊＊＊＊

「幽霊退治しない？」
「は？　幽霊退治？」
俺は数回、まばたきをしながら相手を凝視した。
「そう、幽霊退治」
相手はそんな俺の表情がおかしいのか、くすりと笑いながら答える。
部屋には古いポップソングが流れていた。ラジオ独特の雑音も織り混ぜ、その音楽は絶妙な響きを出している。この聞き覚えがある曲は、高校時代に学校の先生が聞かせてくれたやつだ。
「あんた……突然、何言ってんだ」

＊＊＊

これは本当に突然の出来事だった。今から十分前、俺の携帯に一本の電話がかかってきた。出てみると、つい先日にも聞いた声だった。
『夕食、食べにきたらどう？』
「夕食？」
『そう、夕食。食費削れるわよ』
「おい、俺はオタクとそんな親密な仲じゃ……」
『じゃあ、三人分用意して待ってるわね』
断る前に電話を切られてしまった。全く。なんて強引な誘い方だ。

一体どういう風の吹き回しだろう。あんな電話無視すれば良かったのに、俺は再び幼稚園へと足を運んでしまった。そして、先生は開口一番に「幽霊退治しない？」だと。
突然すぎて、驚く気力もなかった。

＊＊＊

「それで？　なんだって？」
とりあえず、話の内容は知りたかったので俺は先生に聞いてみた。
「だから何回も同じこと言わせないでよ。あなたが幽霊退治をするの。幽霊退治」
何が何だかさっぱりわからない。

「幽霊退治……？ 俺が？」
「なに、できないの？」
おい、良く見てみろ。俺は祓い屋でもなんでもないぞ。そんな漫画に出てくるようなことを俺にやらせる気か。
「できるわけないだろ。というか、俺はそういう非現実的な事からはもう、おさらばしたんだ。葵にやらせろよ、葵に。向こうの方が専門だろ。何であいつじゃなくて俺に頼むんだ」
「葵くんには別の仕事を頼んでるのよ」
「う……けど他にも俺より使える奴が他にいるだろ。赤城さんとか」
俺の困った顔が楽しいのか、先生はずっとニヤニヤしている。
「周ちゃんと幽遊ちゃんは旅行に行ったのよ。しばらく休みがなかったからって幽遊ちゃんが怒っちゃって。それと、ご存じだろうけどリニアとは連絡とれないし」
飲みかけの炭酸を机に置き、先生は静かに説明するが、この態度からして俺にはその説明も信じられ難い。
「なら、残ったカードはあなた一人。あなたがやるしかないじゃない？」
この女……『じゃない？』だと？
俺は先生のセリフを恨めしそうに繰り返した。
「じゃない。 俺はやらないぞ」
俺も俺だ。何も考えずに、のこのことやって来たのがいけなかった。そんなに親しい間柄でもないのに、わざわざ電話までしてご飯に呼ぶわけがないじゃないか。何か用事がある

はずに決まっているだろ。まったく俺も気が抜けすぎていたな、反省しよう。
「大体、俺が退治なんてできるわけがないだろ。常識的に考えてみろよ。俺は葵みたいな特異な能力は持っていない。簡単な魔法しか使えないんだ」
「へー」
先生は雑誌を右手に飲み物を左手に、適当に相槌を返してきた。とても暇そうな顔をしている。目の前の机に大量の書類が積まれていることに気づいてないのだろうか。
「『へー』じゃなくて……。もしもし？　俺の話聞いてたか？」
「あ、うん、聞いてるよ」
一瞬だけこちらに視線を向けたが、すぐにそれは雑誌へと戻る。
こいつ……聞いてねえ。さっきから三ページはめくってるぞ。
「どうしてもやりたくないの？」
じとりと先生を睨んでいると、やっと彼女はまともな会話をしてくれる気になったようだ。
「どうあってもしたくない。アルバイトも勉強もやらなきゃいけないし、俺だって忙しいんだ。神父でも祓い屋でもないのに余計な用を増やしたくない」
「成程。分かった、それなら仕方ないわね。いたずらに呼び出して悪かったわ」

――カランッ

先生が雑誌を閉じた際の風か、飲み終えた空き缶が床に落ちた。静かな職員室に缶の音が響く。お互い何も言わずに、相手を見つめ合う。しかしそれは穏やかではなく、どこか敵

意のようなものが含まれている気が……。
「奏ちゃん、そこにいるの？」
不意に、先生が困った顔でドアの方を見た。すると、いつからいたのか奏の顔だけがドアから覗いていた。俺が奏に声を掛ける間もなく、先生は会話を進める。
「奏ちゃん、巫女よね？」
「うん」
「今回のことできる？」
「できる」
「じゃあやってくれる？」
「うん」

俺が口を挟む暇もなく、とんとん拍子に話が進んでしまった。先生は本当に先生のような表情を浮かべながら奏の頭をなでている。
「今回の場所は奏ちゃんが通う小学校だったから、このまま放置したら奏ちゃんも心配すると思ってたの。ちょうど良かったわ。あ、もちろん報酬はちゃんと支払うからね、といっても生活費にいくけど」
多少は申し訳ないのか、先生はそっと頬を掻いていた。いや、そんなことはどうでもいい。それよりもっと気になるところがあるだろ。
「おいおい、ちょっと待て。こんなこと子供にさせるのか」
「仕方ないじゃない、放置しておくわけにもいかないでしょ」

冗談だろ。いざとなれば、命も危ないっていうのに。
奏、一人に任せるなんて……。

―ん？

何故か、奏が茫然と俺を見つめていた。

「……」
「……」
―いやいや、ちょっと待ってくれ。
「……」
「……」
こんなのただ見て見ぬふりすればいいじゃないか。いくら可愛い妹分がお願いしたとしても、俺は疲れているし忙しいし。そうそう、俺はもうこんな非現実的なものとは関わらないって決めたじゃないか。だから…ほら……こんなもの見て見ぬふりを……。
「……」
「……」
「……」
「……」

できるわけがなかったのだった。こうして俺は久しぶりにこのような類の仕事を引き受けてしまったのだった。畜生。必ず報酬もらってやる……五割は確実にもらってやる、畜生!!
先生はどこからかハンカチを取り出して、清々しい笑顔で見送りをしてくれた。
「いってらっしゃーい」
「うるせぇ!!」

＊＊＊

過程はともあれ、俺は奏と共に学校へ向かった。学校までは大して遠くはないはずだが、寒さのせいでとても遠く感じてしまう。
「寒いな」
「うん」
正直にいうと俺はだいぶ緊張している。この手の仕事とはしばらく無縁だったということもあるが、何よりめんどうなことに巻き込まれる可能性が高いからだ。
何かが起きる前にとっとと事を収めよう。
ちらりと隣を盗み見る。たぶんこの緊張の原因はここにもあると思う。奏とこんな風に二人で歩くのは初めてだ。なんだかいつも話している時とは違う雰囲気で、妙な感じがする。

いつも以上に奏が大人びて見えた。仕事という名目があるからだろうか。

説明が遅れたが、奏はかなり能力のある巫女だ。無免許であるのは仕方がないが仕事はできるから大丈夫だと聞いたことがある。ちなみに巫女が使う神通力も魔法の範囲内であるため、奏も一応魔法使いだ。最初に【魔法】を大成した人曰く、【説明することはできても話にはならない力】。これが魔法というものらしい。

実にあきれる理論だ。その後、長い年月を経て様々なタイプへと分かれていったらしいが、本人はそこまで気にならないらしい。その本人というのは今頃、幼稚園の職員室でおなじみの炭酸飲料片手に雑誌でも読んでいるんだろうが。

一人で考え事をしながら歩いていると、いつのまにか奏が先頭にいた。奏も緊張しているのだろうか、少し肩に力が入っているようだ。

無理もないか、今回は奏がメインの仕事だもんな。

「そういえば、巫女の服は着なくてもいいのか？」

「……」

奏の緊張をほぐすつもりで声をかけたが、返事が返ってこない。逆に気まずくなってしまった。この状況を打開するには―。

「俺の中の巫女のイメージって巫女装束着て、鈴振りながら踊る感じなんだけど奏もそういうことやるのか？」

窮余の一策として、頭の中に浮かんだ疑問をそのまま言葉にしてみた。

「……」
奏は足を止め、少し首を下げた。
―あ、やばい。失言だったのか？
「……しない」
「え？」
奏はすっと体を反らして、俺の目をまじまじと見つめた。俺が真面目に質問をしているのかを判断しているようだ。
「そんなことしないよ」
「あ、ああ。そうなのか。ごめん、ごめん」
奏の迫力に気圧されてしまった。やはり、触れてはならない部分だったようだ。
「必ずしも巫女がそういうことをするわけじゃない」
「へえ」
「うん、そうだよ」
そして奏は、また前を見て歩きだした。
奏のこのような反応はかなり新鮮だった。いつもは会話という会話が成り立っていなかったから。どうせなら、この機会にもっと聞いてみるか。
「じゃあ伝統服を着るのか？ 今着ているのは普段着だろ？」
質問してから数秒間。返事もないが、足を止める気配もない。聞こえなかったのだろうか。
もう一度聞こうと思った瞬間、奏がぽつりと零した。
「……恥ずかしい」

「え？」
「あんな服着たら恥ずかしい」
そうか。いくら大人びて見えても奏は小学生だった。確かに、その年頃の女の子にはあまり好まれる服装ではなさそうだ。
「悪いな、変なこと聞いて」
思わず俺は笑ってしまっていた。前を歩く奏の表情は見えないが、おそらく彼女も顔を赤めているようである。年相応の反応で俺は少し安心したのだった。

俺たちが住んでいるこの町には幼稚園から高校まで全部ある。おかげで自然と人が集まり、多くの団地が軒を連ねている。そんな住宅地から少し歩いたところにある小学校。町内に二、三か所ある内の一つ。そして、奏が通っている学校だ。
さすが夜の学校。昼間とは全然雰囲気が違うな。
俺と奏は昇降口を抜け、廊下に出た。俺たち以外誰もいない廊下は、静寂に満ちていて、本当に得体のしれない何かがいるようだ。
「何階に行けばいいんだ？」
奏はゆっくりと階段を指した。
「四階。五年生の教室」
「奏は何組なんだ？」
「二組」

奏は右手でピースを作り、ぽつりと答える。
四階に上がると、【5‐1】という看板が真っ先に目に入った。
「それで、どこの教室に」
俺が訊ね終わる前に、奏は二組の教室へと向かっていった。

―奏のクラス？

仕方なく後ろをついていくと、奏はロッカーの前に立っていた。そしてポケットから鍵を取り出し、ロッカーを開けると、中から何かが転げ落ちた。

―御幣だ。よく巫女さんが振っているやつ。

「……いや、何で御幣が学校のロッカーにあるんだよ」
「……」
奏はこちらを見ているが、返事がない。どうやら教えてくれないようだ。床に落ちた御幣を奏は丁寧にポケットへと入れた。とりあえず、幽霊退治の準備は整ったみたいである。
「さて。どこで幽霊が出るんだ？」
「隣のクラス」
奏の指示に従い、俺たちは隣の三組へと移動する。
「そういや、こんな勝手に入っていいのか？ 普通は警備員がパトロールしているんじゃな

いか？」
「うん。だから先生が前もって説明してたよ」
……あの女、本当に色んな意味で怖いな。
教室に入ると、俺はポケットの中から紙の束を取り出した。そしてドアの周りとその周辺にそれをつけると、『誰も入れない』と紙に文字を書く。

これはただの落書きなどではない。言葉と文字には本当に力が入っている。拳より言葉が強いという言い伝えがあるように、物も言いようでは角が立つという諺は真実だ。古来より、言葉と文字には巨大な力が込められている。
そう、魔法の原理はここから始まる。俺も仕事をするからには一通りの魔法は習った。魔法の構成は表音文字と表意文字に分かれていて、俺がよく使うのは表音文字の方だ。文字を適当に書いた後、自分でもよくわからないが力を込めると、その文字の通りの効果が発揮されるらしい。

俺が入口で作業している間、奏は幽霊が存在するのか否かを確認するため、机を整理して儀式を行っていた。

――御幣を振りながら。

よく揺れる。奏は時々、こちらの様子を伺いながら淡々と儀式を進めていく。巫女さんが

儀式をしているのを見るのは初めてだ。やっぱ、どんな宗教であれ神聖な儀式の最中は独特な空気感があるな。教室が一瞬の内に別の空間へと変わったように感じる。
しかし、次の瞬間、荘厳な雰囲気に満ちていた教室は一気に現実へと引き戻された。

――がらり。

「なに!?」
背後で教室の扉が開く音がした。おかしい、俺はさっき紙を貼ったはずだ。いくら俺に才能がないといっても基本は学んだ。あんな初歩的な魔法くらい失敗するわけがないはずだ。なのに、何故ドアが開くんだ。まさか幽霊、いやもしくは俺より高度な魔法使いか。
「あら」
現れたのは若い女の人だった。どうやら一般人らしい。

さて、どうしようか。
この状況を何て説明するか。まず、俺の後ろにいる奏が何をしているのからだな。答えは『儀式を行っている』。では次に俺は何をしているのか。これも簡単だ。正解は『それを見物している』だろう。この二つを参考にして、現在俺たちは他人の目にどう映っているのだろうか。
「……」
「えっと、その、だからですね、これは……そのちょっとした事情がありまして、だから

その」
「奏ちゃんじゃない」
―え？

「こんばんは」
「こんな時間に何してるの？」
「儀式です」
「そう、頑張ってね」
「はい」
俺のことはそっちのけで会話が進み、あっという間に彼女は教室から出ていった。
「誰……？」
「担任の先生」
「そう、なのか、でも何で？」

素直に疑問を零すと、奏が最初から説明してくれた。実は今回の件を依頼したのは先ほどの担任の先生であり、彼女の言葉によると、『学校に幽霊が出ると』いう物騒なうわさが子供たちの間で大きく広がっているらしい。そこで奏が巫女だと知っていた担任の先生が密かに奏に依頼したというわけだ。学校側としても、子供たちを落ち着かせるためというのと事態の収束のためだろう。問題は、俺一人が何も知らなかったということだ。帰ったら、

問い詰めてやる。
「そういや奏は、学校に幽霊が出ていることを知らなかったのか？」
「うん」
「巫女なら真っ先にわかるんじゃないのか？」
「見れなかった」
「周りの噂は信じなかったのか？」
奏はこくりと頷く。意外と直接目にしないと信じない性格らしい。
「じゃあ、何でこんな依頼引き受けたんだ？　友達が心配だったのか？」
「うん」
「へえ。それで？　儀式を行った結果は？」
「何もいない」
「そうか」
幽霊がいないなら、いないでいい。何も起きていないのが一番だ。そもそも、幽霊のうわさは一部の子供たちが適当に作った嘘が広まっただけかもしれない。
「じゃあ、帰るか」
机を元通りに直し、俺たちは教室を出た。

――そろり

「ん……？」

突然、奏が俺の腕を掴んだ。
「どうした？」
奏は少し強張った表情で前を指さしていた。つられて俺も前を向く。
するとー、白く透き通った存在が俺たちの目の前を通り過ぎていった。
ゆっくり、とてもゆっくりと。
こういうときは目を合わしてはいけない。これが幽霊に対する正しい対処法だ。
そして非常に小さな音だったが、よく耳を澄ましてみると、その物体は何かを呟いていた。
—行きたくな
—疲れて
—ないから怖い
—遊びた

＊＊＊

「狂ったのか？」
幼稚園に戻ると、真っ先に俺は先生へと詰め寄った。

「何が？」
「とぼけるな、学校に出たのは幽霊じゃなかったぞ」
「あら、幽霊じゃないの？」
あくまでも冷静に対応する先生に頭が痛くなってくる。
「いたずらをするにも限度があるだろ。子供まで動員しておいて幽霊じゃないだと？何を勘違いしているのか知らないが、俺はあんたにあまりいい印象を持ってないからな」
「はあ……とりあえず落ち着きなさい」
「何が落ち着けだ」
「幽霊ではなかったんだろ？」
突然、先生の目の色が変わった。やっと真面目に話を聞くらしい。
「ああ、幽霊ではなかった」
「それじゃあ何だと思う？」
「……魔法か？」

そうだ。最初は幽霊かと思ったが、あれは幽霊なんかではなかった。あれは学校に通っている子供たちの不満が積りに積って一つになった、いわゆる【念】と言われるやつだ。言葉には力がある。魔法を使わない人であれ、その人の言葉には力が籠る。子供も例外ではないのだ。
「そう、あれは魔法だった」
先生はそう言ってため息をつく。

「結局、先生が行くのが面倒くさかっただけだろ」
呆れたように皮肉ると、意外な答えが返ってきた。
「半分はね」
「……残りの半分は？」
「今回の件が本当に魔法のせいだと言うのなら、私を動かすことが目的だったに違いない」
―本当に魔法のせい？　どういうことだ、先生を動かすことが目的？
答えは解っているが中々に口に出せない。きっと確信が持てないからだろう。そんな俺の内心を見破ったのか、先生はまるで宿題を出すかのように俺に質問をする。
「今感じている疑問をそのまま言ってみなさい」
今感じている疑問。それは――
、
「いくら子供たちの言葉が積もったといっても……その、実体が見えるほどの【念】になることは……」
薄々感じてはいた。でも、まさかとは思うが。
「学校に……魔法使いがいる……？」
「正解」

＊＊＊

魔法使いを実際に目にしたのは中学生の頃だ。その時、俺が目にした魔法使いというのが時宮葵だ。最初は魔法使いが何なのかも知らなかったし、ただの超能力者かなんかだと思っていた。今になって考えてみると、友達がそんな特異な奴にも関わらず驚かなかった俺も相当特異だったのかもしれない。

葵の能力は、いたずら程度のもので俺もそこまで魔法がすごいとは思っていなかった。高三の時には手から炎を出す珍しい魔法使いを見たが、あれ以来俺はすっかり【そちら側】の人間とは出会っていなかった。まだ存在しているのかすらも怪しく思っていた程だ。それなのに。

「……また突然だな」

「なに、怖いの？」

「ああ、怖い」

素直に返事をすると、先生は驚いた顔をしていた。

「何で？」

「さあな。魔法使いとは色々と過去にあったからな」

「でもあなただって魔法の一つや二つ知ってるじゃない？ 魔法使いじゃないの？」

「あれは護身用だ」

投げやりに答えると、先生はそれ以上の追求はしなかった。そしてテーブルの上のジュースを口に含み、大きなあくびをする。目の前でこんな呑気な態度をとられるとイライラし

てくる。どんな事件が起きたら、この女は慌てふためいて対応をするのだろう。いや、今のこの冷静な態度こそが大人の対応なのか？俺がまだまだ未熟だということか？そんなことはないはずだ、俺が普通で向こうが異常だ。
「ふふ……まだ聞きたいことがあるんじゃないの？」
俺がイラついているのを知っているだろうに、先生はさらに煽ってくる。
「今回の件の裏には何かあるんだろ？」
先生は俺が尋ねる内容を既に予想していたのか、余裕の笑みで話し始めた。
「この間、保護者と先生が集まる懇親会があったのよ。一応、奏ちゃんは親がいないから保護者である私が出て、まあたくさんの親御さん達と軽く会話をしたりしたの。それでその懇親会の後に担任の先生と個人個人で面談する機会があってね。その時に、学校内で幽霊が出るという噂を聞いたのよ。向こうも奏ちゃんが巫女だということは知っていたから、私にそのことを言ってきたんでしょうね。まあ私も最初は、どうせ学校によくある七不思議みたいなものだと思って話し半分に聞いてたけど」
「……けど？」
「数日前、葵くんが仕事を終えて帰ってきた時に、現場にこんなものが落ちていたって渡されたわ」
先生は後ろの戸棚を開き、机の上に置いた。透明なビニールに包まれていたそれは、とても見覚えがある布きれだった。
信じられない……だってこれは―、

「そう、三年前にあなたたちが着ていた制服」
「なんで……」
俺が愕然としていると、先生は試すように聞いてきた。
「鈴木くんはどう思う？」
「俺の意見を聞いてもどうしようもないだろ。というか、もう答えは出ているんだろ」
「何か別の考えがあるかもしれないじゃない」
「俺は特にない」
「それなら仕方ないわ。私もそこまで重く捉えるつもりはないんだけど、何もない街で急にこんなものが出てくるとね。少し警戒しといた方がいいんじゃないかって思って、この布切れについて色々と調べてたんだけど」
「その出所が奏が通ってる小学校だったってことか」
「ピンポーン」
ご機嫌な先生はウィンクをしながら肯定した。当たってほしくはなかったが。
「辻褄が合いすぎているの。誰かが意図的にやったとしか思えない、放置しておくのもなんだから奏ちゃんにお願いしたのよ」
「結局、幽霊はいなかったけど」
「それは結果論。あなたたちが動いてくれたから、こういう結果が出たんじゃない」
「思念……子供たちに直接、害はないんだろ？」
「でも親御さんたちの耳に入ると、色々と面倒くさいでしょ」

つまり犯人。というか向こうの狙いは事が大きくなることだったってことか。
「学校自体が気に入らなくて犯した悪戯かもしれないけど、もっと何か大きなことを狙っているのかもしれない。現状では、証拠がその思念だけだから何もわからないわね」
先生は大きく肩を落とし残念そうにして、こちらの様子を窺っている。
「それで……俺にどうしろと言うんだ？」
「処理できる？」
「できない」
「どうして？」
「俺はちゃんとした魔法使いでもないからな」
「奏ちゃんがいるじゃない」
「子供をそんな危険なことに巻き込むのか？　あいつは小学生だ、何かが起こった後じゃどうしようもない」
「そんなの関係ないわよ」
「関係ある」
お互い気づかない内にどんどん距離を狭めていたようだ。先生の顔が先ほどより近くにある。ここからは気合の勝負だ。後退することはできない。大体、無理やりに押し付けられた俺達の立場を考慮すべきだ。
張りつめた空気が流れている。それはまるで、緊張感という糸が張り巡らされているかのようで―、

「大丈夫」

静かな部屋に幼い声が響いた。振り返ると、とっくに部屋に返したはずの奏が入口に立っていた。

「私はできるからいい」

奏はいつもの無表情で俺たちを見ている。そう答えると思ったから奥にやっといたのに。言い争っている内に向こうまで声が響いてしまったようだ。奏が了承してしまったとなると、話し合いは終わったも同然だな。

今ここで俺が奏の援助に行かないと、あいつは一人で処理しなければいけなくなる。それはとても危険だ。

「わかった……手伝えばいいんだろ」

子供が勝負に勝ったかのように、先生は満面の笑みを浮かべた。

「その制服の布端はどうするんだ？」

「これは非常に重要なものよ。あの制服は三年前の事件以来、学校側がわざわざ制服のデザインを変えたから二度と作られることのない代物。つまり学校側があの事件に関連する人物を引き入れた可能性もある」

先生は全てを話してはくれないようだ。

それでいい、わざわざ余計なことに足をつっこまなくていい。

「じゃ、明日中に終わらせる」

部屋を出る瞬間、文句でも残していこうと思い、俺はちらりと先生に向き直った。

「普通に過ごしていいって言ってたあんたが、何でまた俺にこんなことさせているんだろうな」
「人手不足だから？」
至極真っ当な答えが返って来てしまった。

＊＊＊

翌日。今日はかなり忙しかった。教授に呼ばれて学校に行き、図書館で課題をこなし、アルバイトに行き、休む暇もない。むしろ、休み暇がないからこそ頑張ることができるのかもしれない。怠惰は敵だ、何も考えずに動き続ける方が楽だと思う。

バイト終わりの午後七時。外に出てみると、辺りは真っ暗で冷たい風が疲れた体にしみてくる。いくら重ね着をしていても寒いものは寒い。もっと厚い服装にすればいいのだろうが、今日は動きやすい格好でないと駄目だった。なぜなら、この後にも予定が控えているからだ。

奏と共に小学校の幽霊退治。今日は昨晩の倍以上の紙束を持ってきており、あらかじめ文章も書き終えている。今度はもう失敗しない。しっかり奏のサポートをしなくては。
「とりあえず奏を迎えにいくか」
幼稚園まで歩いて二十分。マンションに囲まれた道は、街灯は少ないが多くの木々が生い

茂っている。緑が多いのは良いと思うが、夜はどうしても物悲しく感じてしまう。そして、この暗さではいつ犯罪が起きてもおかしくないので心配だ。
昨日と同じ部屋のドアを開けると、いつも通り仕事もせず雑誌を読みながら寛いでいる先生が「早いわね」と一言声をかけてきた。
あんたに用はないんだがな。
先生の隣に座っていた奏に視線を送ると、彼女は小さく頷き俺の方へ駆けてきた。
「いってらっしゃーい」
呪いのような激励を無視して、俺たち二人は再び学校へと向かう。

＊＊＊

昨晩と同じ光景。やはり夜の学校には慣れないようだ。
「一応ここにもつけておくか」
また一般人に入ってこられると困るため、校門に『絶対に入れない』と書いた紙を貼っておく。そして、廊下にも『動けない』『逃さない』と書いた紙をあちこちに貼っておいた。廊下の構造上、邪念体のようなものに逃げられると人間の足で追いつくことは不可能なため、このような罠を作ることにした。以前もよく使っていた方法だ。昨晩と同じように、ロッカーから御幣を取り出してきた奏と例の教室に向かう。
教室に入り机を整理すると、奏は神聖な儀式を始めた。とても集中している。奏の邪魔が

入らないよう、サポートするのが今日の俺の仕事である。

午後十時、点滅を繰り返す監視センサーの明かりだけが教室を照らしていた。窓からこぼれる街灯の光は頼りなく、むしろ不気味な雰囲気を一層増しているように感じる。
静かな教室は、まるでこの空間だけ時間が止まったかのように錯覚するほどだ。俺たちを残して動き続ける時間。ここで何が起こっても、起こらなくても世界は回り続けるのだ。
ぼんやりとそんなことを考えていると、突然息が詰まるほどの巨大な圧迫感を感じ、思わず両手に持っていた紙束を握りしめた。

―何かが近づいてくる。

言葉にできない程の不気味な音が廊下から聞こえてきた。
それは徐々に大きくなり、微かに内容が聞き取れるようになってくる。

――行きたくな
――疲れ
――ないから怖い
――遊びたい

その時だった。突然、大きな音と共に風が吹いて教室のドアが勢いよく開かれた。俺たち

の目の前に現れた白く透き通るような塊は、昨晩よりも更に巨大になっている。特に敵意があるとは思えないが、何が起こるかはわからない。大人しい内にさっさと拘束して奏に祓ってもらうのが一番だろう。祓うこと自体はそこまで難しくないはずだ。
しかし先ほどからずっと聞こえてくる声が耳に痛い。機械音のようなそれは、同じ言葉を何度も何度も繰り返し続けている。自分の集中力を保つことで精一杯だった。
「―!!」
奏が何か祈祷の言葉でも言ったのだろうか。『声』のせいで何も聞こえなかったが、奏のおかげで邪念体は教室の外へと逃げ始めた。
「よし！」
作戦通りだ。
俺は準備していた罠をすぐに起動し、邪念体を捕えた。
「捕えたぞ!!」

一息ついて邪念体を良く見てみると、街灯の光に照らされているそれは、とてもきれいだった。光が透過された邪念体の表面には深い朱色が映っており、まるで小さな深紅の海のようだ。そんな神秘的な光景に目を奪われていた俺は気付かなかった。
貼り付けていた紙が一枚、また一枚と落ちていることに。
そして次の瞬間、紙が一気にはじけ飛んだ。
「な……」
反応する間もなく、邪念体は俺との距離を一瞬で詰めてきた。

「くっ……」
苦しい。息ができない。邪念体は俺の首を一定の力で絞めている。
くそっ、油断していた。これは仕事だ。一瞬でも気を抜いたら、生死に関わってくると知っていたはずなのに……久しぶりすぎてそんな基本的なことまでも忘れていたのか、俺は。
あまりの締め付けに首筋近くの皮膚が破れてしまいそうだった。
血が流れている感覚がする。

ふと、奏の姿が端に見えた。どうしていいかわからないようで、慌てた表情をしている。
「く……るな」
最後であろう力を振り絞って、俺は奏へと声をかけた。今、奏が来たらあいつも危険な目に合わせることになってしまう。怪我を負うなら俺一人で充分だ。
瞼が重くなってきた、頭に血が巡っていないせいだろう。

――『こんなことで怪我なんてしたくない』

唐突に昔の記憶がよぎった。
そうだ、こんなところで諦めてどうする。危険なんて、この仕事に限ったことじゃない。
危険はいつどこで何をしようがついて回るものだ。
それが常識であれ、非常識であれ……
感覚が乏しくなっている右手を何とか動かし、ポケットから紙を取り出した。

すると、バンッという音と共に小さな爆発が起こり、首に巻きついていたものが解け、俺の身体はまっすぐ床に向かって落ちていった。受け身もできずに落ちた俺の身体には、衝撃が直接染み込んでくる。
「う……腰……」
物凄い痛みだが、先ほどの息苦しさよりマシだ。駆け寄って来てくれた奏の頭を撫でて、無事を示すと、俺はすぐに邪念体に向き直った。
爆発によって後退した邪念体の周りは、同じく爆発の跡が残る床があった。一瞬、『弁償』という言葉が頭によぎったが、まあ先生が何とかしてくれるだろう。いや、してもらわなければいけない。

さて、奏に情けないところばかり見せてられないな。
「―魔法はかなり単純なんだ。ある程度の能力を備えると応用も効く。だからこんなこともできるようになる」
不思議そうに見上げる奏を横に、俺は『止まれ』と書いた紙を折って紙飛行機を作り、「1、2、3」という合図で邪念体に向かって紙飛行機を飛ばした。
「じゃ、さっさと仕事終わらせるか」
奏は安心したように頷き返してくれた。
最後に投げた紙飛行機によって拘束された邪念体を、奏はあっという間に清めた。
「ふう……これで一段落だな」
額に張り付いた汗を拭おうとした時、首筋に痛みが走った。空白の期間が長かったせいと

はいえ、あんな化け物にやられそうになるなんて。まあ、無事に終わったからいいか。
「さっきは心配かけて悪かったな」
邪念体の消失を見届けた奏に声をかけると、彼女はじっと俺を見つめてきた。
「……心配した」
不安な色をした大きな瞳が俺を見据えてくる。
「……ごめんな、これからはもう無謀なことはしないから安心してくれ」
奏の頭を小さく撫で、俺たちは学校を後にした。

＊＊＊

「あらら」
先生は笑いながら俺の格好を眺めている。服には学校の埃と爆発による汚れがいっぱいついていた。
「へえ。かなり苦労したみたいね？」
「……ああ、大変だった」
奏と一緒に幼稚園に戻り、先生に結果を報告しに行くと、この女は「腕が落ちたのね」などと皮肉は言うが誉めることはなかった。まあ期待もしてなかったが。
「奏がちゃんと退治したから、もう学校には出ないだろ」
「どうかしらね。根本的な原因の魔法使いは退治してないから、まだまだ何か起こるかもよ？」

―あ、魔法使い。

「そういえば忘れていた!!」

俺が絶叫して頭を掻き毟る姿を、先生は大きな声で笑いながら見ていた。

「鈴木くん大丈夫よ、心配しないで。ひとまず、今回のことで向こうも何か思うところがあるでしょうし。まさか邪念体があんな風に暴走するとは思ってなかったはずよ」

「ん？　どういうことだ？」

目を閉じて考えているような素振りをする先生は、ゆっくりと説明し始めた。

「子供たちに熱心な教育をして立派な大人にするのが普通よね。でも子供たちの感情なんて、そこにはないのよ。親が『全部あなたのためだ』って決めるから。子供たちがいくら友達と遊びたいと思っても親が勉強を強要する。親も強要したくないけど、しなければならない。それは隣の子もしているからってね」

「どういうことだ？　それは普通じゃないのか？」

「まあ普通と思うかもしれないけど、そんな『普通』を子供たちは恐ろしく感じてしまったのかしらね。遊びたい年頃に、鞄を背負って塾に通って家に帰れば予習に復習。それはある種の悲劇みたいなものじゃない？　こうして子供たちの心の中には不満が生まれて、それが学校に積っていった。それを魔法使いは利用したのよ。子供のような純粋な感情であればある程、邪念体を召喚するのは簡単。そして、向こうの目的は保護者や教師に噂を広まらせるためってとこかしら」

「いや、魔法使いが何でそんなことするんだ？」
「その先は私にもわからないわ。ただ邪念体は危なくないという仮定で出発したっていうのは明確ね。全く……子供たちの心を元にしたんだから、むしろ攻撃的に決まってるじゃない」
そう言って、先生は窓をそっと開けた。冷たい風が先生の髪を揺らしている。
「これからどうするんだ？」
「何が？」
「まだ完全には終わってないんだろ、魔法使いも捕まえてないし」
この結末はあまりにも中途半端だ。
「心配しないで、多分これ以上学校に関する噂や事件は起きないはずよ」
確かに俺もその点については同意できる。今回は偶々俺たちだったから良かったものの、一般人だったら本当に大事になっていたからだ。
「まあ向こうが望んだ結果が何だったかはわからないけど……」
「けど？」
「幽霊退治は終わったんだからいいんじゃない？」
先生は大きく伸びをして笑いをこぼした。言われてみれば、綺麗に終わった気がしなくもない。大きな事故も起きていないし。
「そう……だな」
「そうそう」
いつもの清涼飲料水を気持ちよさそうに飲み干す先生。

――では、そろそろ代価を受けとる時間だな。

「報酬を早く……」

「はい」

先生は俺が言いだす前に、引き出しから小さな封筒を取り出していた。

「今回は苦労したみたいだからね」

「あ……ああ」

俺はしばらく目の前に置かれた封筒が信じられなかった。まさかこんなあっさり貰えるとは。多分、俺は今とても笑っているだろう。これでしばらく、ゆっくり安心して過ごせると思うと、努力の甲斐があったものだ。たまには、努力するのも悪くないな。

「じゃ、俺はもう家に帰る」

先生と互いに、にこにこと笑いながら『お疲れ様』という挨拶を交わし、俺は幼稚園を後にした。

すると、幼稚園を出たところに奏が立っていた。

「どうした？」

「……」

奏は何も答えない。何か言いたいことがあって俺を待っていたんだと思ったけど。

奏は依然として俺を見ている。

「……悩みでもあるのか？」
すると、俺の質問とは関係ない答えが返ってきた
「ごめんね」
「ん？」
「さっき……守れなかった」
「あ、ああ」
何だ、そんなことを言いたくて俺を待っていたのか。
俺はため息をついた後、奏と同じ目線になるまで屈んだ。
「奏が気を使うことじゃないだろ。失敗したのは俺だ、仕事中に油断なんかしたから罰をもらったんだ。奏は自分の役割を果たしただろ。それに何でもかんでも自分のせいにするなよ。まだ子供だろ」
奏は驚いた表情で俺を見ている。
「だからそんな暗い顔するな。報酬も貰ったし何か食いに行くか？」
「でも」
奏は少し戸惑った顔で幼稚園のドアに視線を送っていた。おそらく先生が気にかかるのだろう。
「大丈夫だろ、先生ならカップ麺でも食べるって」
そして、俺は奏を連れて近くの飲食店へと向かった。奏は俺が思っていた以上によく食べるようだ。予想よりお金が要りそうだが、奏のおいしそうに食べる表情を見ていたら、別に構わない気がしてきた。

「奏、お腹いっぱい食べていいからな」
「うん」

＊＊＊

コツコツとヒールが床を叩く音が廊下に響き渡る。長い髪に耳飾り、すらっと伸びた脚がスカートから覗く。誰が見ても好感を持つはずであろう魅力的なスタイルの女だ。
ここは小学校、女はどこかの教室に向かっている。下校時間はとっくに過ぎ、教師も帰り支度を終えて学校を後にしている時間帯だろう。
窓から入る月の光が女の顔を照らし、表情さえも明るく見せる。
女は『音楽室』と書かれた教室で立ち止まり、中へと入った。
すると、そこにはもう一人、別の女がピアノを弾いていた。慣れた手つきでピアノを弾く女は、彼女が入ってきたにも関わらず、とても落ち着いている。
「素敵な曲でしょ」
ピアノを弾いていた手を止めて、女は問いかける。
「私のために用意してくれたのかしら」
入ってきた女は気持ち良さそうに笑いながら、机に腰掛けた。
「机ではなく椅子に座ってください。子供たちが一生懸命に拭いた机なんですから座らないでください」
咄嗟に注意を受けた女はブツブツと文句を言うが、女性は笑顔でその反論を受け流してい

る。そして二人同時に口をつぐみ、お互いに別々の方向を眺めていた。
何もしないまま時間が過ぎていくが、その沈黙を楽しむかのようにゆっくりとピアノ演奏が始まった。心がおちつくような曲だ。
「これ何て曲？」
「Carnation……」
どこかで聞いたことがあるポップソングのようだ。質問した女性はしばらく考えていたが、やがて思い出すことを諦めて窓の外を眺め始めた。
「素敵な曲ね」
「ええ、私この曲が本当に好きです。落ち着いていて。この時代の音楽はいい曲ばかりなんですよ」
女は嬉しそうに話していたが、ぱっとピアノを弾く手を止めた。
再び音楽室に静寂が訪れる。
「何の用事ですか、こんな遅い時間に」
女が口を開くと、窓を眺めていた女性は女の方へと視線を戻した。
「わかっているでしょう、真田先生」
真田と呼ばれた方の女性は顔を上げ、机の方を見返した。
「【金色の魔女】」
「……」

「【黒死病の女】、【マエストロ】……かなり陳腐ですけど、もっともらしい名前ですね」
「古い異名ばかりね、一体いつの時代よ、センスを欠片も感じないわ」
様々な異名で呼ばれていた女は、興味無さそうに自身の爪を眺めている。
「今回の事件で認識が変わりました」
「へえ」
「奏ちゃんの担任になったのは、本当に偶然でした。どうせなら試してみようと思いまして」
「それで？」
「予想通り強かったです」
「評価甘すぎよ」
【金色の魔女】と言われた女は涼しげに笑っていた。自分がからかいの対象にしている子に高得点を出されてしまい、面白くないのだろう。
「それで、どこまでが目的だったのかしら」
真田はまるで昔話でもするかのように淡々とした口調で質問に答え始めた。
「元いた研究所と縁を絶ってから随分経ちました。三年前の事件で研究所自体も大きな損失を受けたので、彼らも組織を統制することも困難でした。私はその時逃げ出した者の一人です。そして研究所を抜け出して選んだのが教師の道でした。そして、先生になって初めての生徒の一人が奏ちゃんでした」
魔女は何も言わずに真田の独り言に耳を傾けている。

「今回の事件に悪気はありませんでした。ただ勉強に苦しんでいる子供たちを見ていると可哀そうだと思ったんです。全部あなたのためだと言われ続けている子供たちをどうにかしてあげたくて。でも教師という立ち場の私ができるのは応援だけ。そんなもの、何も解決してくれないことを子供たちは既に知っているんです、そんな事実が少し残念でした」
「そのまま給料をもらって満足する先生は嫌だったの？」
「どうなんでしょう。もしかしたら『理想の教師像』というものを、研究所で私の脳内へと埋め込まれてしまったのかもしれないです。事実、私は今でもこの感情が本当に自分のものなのかもわかりません。ただ今回の事は、私が子供たちのストレスを取り除きたいという考え一つで起こしたことです」
「その後始末は誰がするのかしらね」
「クラスに巫女がいるじゃないですか」
真田の返答に、魔女は大きな声で笑い出した。
「なるほどね、こちらが遅かれ早かれ処理してくれるってわかっていて起こしたのか。すごいじゃない、あなたもっと大人しいのかと思っていたけど案外頭回るのね」
「邪念体、幽霊のうわさが広がることはある程度覚悟していました。けれど、邪念体を退治すれば、こうした思念自体もなくなるので綺麗な結果に終わる。これが私の考えでした」
「無責任ね、でもまあ結果オーライなのかしら」
魔女は先ほどと打って変わって嬉しそうにしている。
「うちの子はどうだった？」
「彼が暴走した邪念体を簡単に捕えるのを見てびっくりしました。三年前の事件の主役ら

しいですね」
「一つ一つ見守っていたのか？」
「はい、私が起こしたことですから」
「それで結論は？」
いきなり口にした魔女の言葉に、一瞬真田は言葉を失った。結論、つまり『彼はどうだったか』という問いの答えを魔女は訊ねているのだ。
「―『ing』」
真田の答えに、今まで笑っていた魔女の表情が変わった。
「運命の開拓能力『ing』。研究所側も知っていたのね。三年前の敗北で得た教訓が多かったというわけかしら。やっぱり今回の事件もいたずらに起こしたんじゃないの？」
「いいえ。『ing』と言う能力自体は研究所で埋め込まれた一種の常識です」
「常識。それ素敵な言葉よね。どんなことも常識という言葉の下では通用する。しかし『ing』とはね。その能力を持っている本人さえ知らないというのに。まあ私にはどうでもいいけど。また無責任なことをしでかして、私たちに責任を押しつけなければいいわ」
一息ついてから、今度は魔女がひとり言のように話し始めた。
「研究所の子供が先生になったっていうのは私も耳にしていたわ。まさかそれが奏ちゃんの担任の先生だとは思いもしなかったけど。偶然か、はたまた必然か。どちらにしろ一人で今回の事件を起こすにはあまりにも大変ね。後ろに誰がいる」
魔女の質問に、真田は今まで以上の動揺を見せた。
「……私一人で計画したものです」

「そう」

しばらく真田を眺めていたが、魔女はそれ以上問い詰めることはなかった。そして、再び机に腰を掛けると、胸ポケットから煙草とライターを取り出した。

「ここ禁煙です、学校ですよ」

先ほどの動揺はどこにいったのか、真田はごく自然とした表情で魔女を諌めた。

「ああ、悪い、悪い。私も久しぶりだったから何も考えてなかったわ」

煙草を仕舞い直すと、魔女は思い出したように話を切り出した。

「あなたがさっき弾いていた曲、私結構好きよ」

「If you gave me a fresh carnation
I would only crush its tender petals
With me you'll have no escape
And at the same time there'll be nowhere to settle……」

真田が歌詞を淡々と語る。

「魔法も歌詞も力を加えると言う点では同じね」

静かに語る魔女に真田は問いかける。

「逃げるところはありますか」

「……」

「あの場所を離れたら、何か違う世界があると思っていた。けれど、結果は同じ。どこに

いっても社会というのはあって、私たちはそこに適応していかなければいけない。私、自分が無力なのが悔しかったです」
真田はどこを見るわけでもなく、ただ宙を見つめていた。
「Carnationの最後はハッピーエンドなのかバッドエンドなのか誰にもわからないわよ」

「If you gave me a dream for my pocket
You'd be plugging in the wrong socket
With me there's no room for the future
With me there's no room with a view at all……」

魔女は歌詞の一部を呟いた。
「こんな最後もアリだと思うけど？」
真田は驚いた顔で魔女を見返した。
「あれこれ悩んでいるようだけど、そんなことは誰もが経験すること。大体、歌詞をそんな複雑に考えなくていい。音楽は音楽として楽しめばいいのよ」
魔女の言葉に感心したような表情をする真田を余所に、彼女はポケットから小さな袋を取り出す。中に入っているのは制服の切れ端だ。
「これ、何だと思う？」
魔女が真田の目の前に差し出すや否や、彼女は勢いよく立ちあがった。ピアノの椅子が倒れたことにも気づいてないのか、怯えた表情をしていた。

「わ、わかりません」
「本当に？」
「……はい」
明らかに関連性はあるが、絶対に出所を言いそうにはないようである。魔女はため息をつくと、ビニール袋を仕舞い直した。
「じゃあ私はそろそろ行くわ」
その言葉にずっと俯いていた真田は顔を上げた。
「もっと……聞いていかないんですか？」
「また機会があるでしょ」
気の抜けた返事をして魔女はドアに向かう。
「普通の人間ではないですね」
「私はただの幼稚園の先生よ」
「私も先生です」
「あら、一緒ね」
「そうですね」
「では、奏ちゃんをよろしくお願いします。先生」
「はい、奏ちゃんのお母さま」
そして、二人の女性の笑顔と共に、音楽室の扉は閉まった

＊＊＊

夜。学校の職員室で、作業をする女教師が一人。彼女の名前は真田だ。
「かなり熱心ね」
「仕事よ」
彼女の後ろに立っている誰かが、嘲笑と共に話しかけている。
「そんなことしなくても、普通に暮らせるのに何で仕事なんかするの？」
声の主は非常に派手な格好をした少女だった。
「私はもう研究所を出たから、働かないとお金が貰えないのよ」
素っ気なく答える彼女に少女は怒りを露わにした。
「それなら帰ってきたらいいじゃん。何で帰ってこないの？」
「そうね、私にもわからないわ。ところで今日は遊びにきたの？」
書類を確認しながら訊ねる彼女に、少女は目を丸くした。同時に頬が赤くなったのを否定するように首を振る。
「そんなわけないでしょ。ただ真田ちゃんが生きているかどうか確認しに来ただけ！」
「そう」
淡々と書類を確認する真田の後ろから、少女も書類の内容に目を通す。もちろん理解はし難いので、真田に逐一尋ねるが彼女は適当な返事を返していた。
最後の書類チェックを終えると、真田は椅子を回転させて少女に向き直った。
そして、その少女を真正面から見据えて忠告をする。
「気をつけて」

「……何に？」
少女は突然の真田の言葉に困惑を示していたが、彼女の目は真剣だった。
「金色の魔女が探している。餌を浮かべるのが急すぎたわ」
その言葉でやっと理解したのか、少女も真剣な表情に変わった。
「そんなこと覚悟してた。それに真田ちゃんには関係ない」
「あるわ」
「なんで」
「友人を危険な目に合わせるわけにはいかないわ」
友人という言葉に反応したのか、少女の目は一層大きくなった。
「何それ……放っておいて!!」
「お願いだから無茶なことはしないで」
「……わかった」
真田の真剣さに圧倒され、少女はしぶしぶ了承したのだった。

＊＊＊

「くそっ!! 騙された!!」
夜遅くだが、俺、鈴木聡太は絶叫していた。近所迷惑なんて今は後だ。
「全部千円札ってどういうことだ、あの女!!」
あの場で内容を確認しなかったのが俺の最大のミスだ。おかげで昨日の晩飯は災難だ、コ

ツコツと貯金していたお金が一気に飛んでいってしまった。まさか奏があんなに食べるとは思わなかった。いや、奏がたくさん食べることには構わない。問題は報酬の方だ。昨日の大量出費のせいで、俺の頭の中ではずっとお金の計算が続いている。バイトのお金をいくら生活費と学費に回すか。もっとバイトの量を増やすか。

「はあ……」

それにしても妙な感じがする。昨日のような出来事がこれからも、頻繁に起きて今後の俺の私生活を邪魔するような気が。まあ気のせいだろう。とりあえず、このまま幼稚園に向かって正当な報酬をもらいにいくとしよう。それに当分の間は食費節約のため、向こうで御馳走にならないといけないな。

-Track.1"Pianoman"End.

# TRACK 2

Retrace

Retrace the steps we took on that lost summer night...

# Track.2　Retrace

ざわざわ。

ここはとある空港だ。大勢の人々が忙しなく行き来している。案内放送から流れる声。それに合わせて移動する人々。長旅からようやく帰国したのか、たくさんの荷物とお土産を手に移動する人。再会を喜び、抱き合う人。空港は様々な感情で埋め尽くされている。そんな騒然とした場所に一人の女が立っていた。

眼鏡をかけ知的そうな外見の女。きらきらと輝く銀髪に、空のように澄んだ青の瞳。顔立ちからして明らかに日本人ではなさそうだ。通り過ぎる外国人でさえも、珍しそうに彼女を眺めていた。そんな周囲の視線を楽しむかのように彼女は自信満々な顔で出口へと向かう。

「三年ぶりか……」

眼鏡をくいっと上げる。これはどうやら彼女の癖のようだ。

「少しも変わらないな」

まるで何回も訪れたことがあるような口ぶりだ。女は出口が見えると、ほんの少し歩調を早めた。そして外に出るや否や、

「えええええ!?」

―絶叫する。

「どうして誰も迎えに来てないの!? 三年ぶりなのに!!」

何か手違いがあったのだろうか。女は迎えがいないことに、怒りの表情を浮かべていた。

「何だよ!せっかく戻ってきたのに!!歓迎プラカードの一つもないじゃないか!!」

彼女は行き場のない怒りにひたすら地団駄を踏み、壁を蹴りつづける。他人の視線は全く気にならないようだ。

こうして数分が過ぎ、彼女も冷静さを取り戻すと大きく深呼吸して顔を上げた。

「もういいっ!! 迎えが来ないんだったら、私から行ってあげるわ!!」

「―リニア、参上っ!!」

女は空に向かって高らかに宣言する。このリニアという女が再び日本に戻ってきた直後、今まで安定していた勢力図に歪みが生じ始める。この女のせいか、あるいは偶然か。ただ明らかなのは、この女が今回起きる事件に深く関わっているという点であり、彼女によってこれまで隠されてきた真実が明かされてしまうという点だ。

リニア・イベリン。『銀髪の魔術師』と呼ばれた女が再び日本に舞い戻ってきた。

＊＊＊

「へっくしょいっ!!」
天城紫乃は思わずくしゃみをした。
「何だろ、誰か噂でもしてんのかな」
ティッシュで鼻をかみながら、彼女は妙な不安感を胸に覚えた。現在、平日の午前中。子供たちのはしゃぎ声が隣から聞こえてくるが、園長先生である彼女はいまだ職員室にこもっている。
「あ、これかわいい!」
パソコンに映し出されるおしゃれな鞄に目が止まった。就業時間中だというのに、この女は他の教師に内緒で、通販サイトを開いている。バレたらまた叱られてしまうからだ。そう、既に三回ほど経験済みなのだ。
「園長先生!? 早く来てください!!」
「……はいはい」
彼女は奥から聞こえる職員の声に、しぶしぶエプロンをつける。
「さっきの鞄、後で買おっかな」
ひとり言を呟きながら扉を開けると、彼女の前に凄まじい形相の職員が立っていた。
「宮森先生……まるで鬼のようですね」
宮森という女性は二コりと笑うと、彼女の腕をがっちりと掴んで教室へと連行した。しかし、そんな天城紫乃も社会人。教室に入ると、一気に表情を変える。

何人もの子供の面倒を見て一緒に遊ぶ。そして事務的な処理も行い、更にはもうひとつの方の仕事も行う。普通の人間ならオーバーワークで倒れてもおかしくないだろう。
だが、彼女は普通ではない。
彼女の身体は事実、ゾンビのようなものであり疲労感も苦痛すらも感じない。
「せんせいー」
「なーに？」
園児に笑いかける先生。何も知らない人間にはただの平凡な人間に映るだろう。
鈴木聡太もこの天城紫乃も。

保育士の仕事は思っていた以上に大変である。子供たちの面倒を見ることに気を使い、もちろん親御さんたちへも気を使う。最近は英才教育の風潮があり幼稚園より塾にいれる人が増えたが、それでも未だに多くの園児がここに通っている。
時々、天城紫乃は思う。このような忙しい日々を送っていたら、魔法関係のことなど考える余裕もないと。ただ別にそれが不満というわけでもない。現に彼女は今の生活をそれなりに幸せと感じている。
しかし、今日だけは何かおかしいようだ。彼女の胸にはずっと、もやもやとした気分が残っているようである。
「杞憂だったらいいんだけど」
天城紫乃は頬杖をつきながら深いため息をこぼす。魔法を創始した女には全く見えない。
こうして彼女の気分が晴れないまま一日が過ぎようとしていた。

夕方。他の職員が退勤すると、天城紫乃は別の顔を見せる。こちら側では、近頃密かに魔法士協会や研究所が動いているという事実を捉えた。先日、鈴木聡太と九条奏を派遣したあの幽霊事件だ。表向きには彼ら二人が事件を解決したが、直接処理をしたのはこの天城紫乃だ。

「三年前にingのせいであんな痛い目にあったのに、連中も懲りないわね」

机の上に資料を放ると、彼女はいつものように冷蔵庫から炭酸飲料を持ち出し一気に口に含む。

その時だった。

「こんにちはー!! 先生」

ノックも無しに勢いよく扉が開いた。

「リニア、来ちゃった!」

予想外の訪問に、彼女は口に飲み物を当てたまま固まっていた。そして、大きなため息をこぼす。

「これだったのか……」

どうやら彼女を一日悩ませていた原因がわかったようだ。

「久しぶりね、何の用かしら」

すると、リニアという女性は両手を大きく広げた。

「逃げる場所がなくなってしまいました! それで私は帰ってきました!」
「逃げる場所？」
「はい!」
「……三年間、ずっと逃げていたということ？」
「はい!」
「あなたって人はもう……」
元気に返事をするリニアに対し、彼女は呆れるように頭を抱えた。普段からマイペースであるこの天城紫乃がそのマイペースを維持できない相手が二人いる。一人は職員の宮森先生。そしてもう一人がこの女、リニア・イベリンである。
「うわ!! これまだ持っていたんだ」
「勝手に触らないで」
「はい、はい……あ、これ可愛い」
「全く……」
あれこれ好き勝手に部屋を見て回るリニア。そんな愛弟子をしばらく眺めた後、彼女は何かを決心したように、手にしていた飲み物を机に置いた。
「それで、リニア。本当に何のために来たの？」
リニア・イベリン。有名な魔法士である彼女に政治的な陰謀が絡んでいるとしたら、いつ抹殺されてもおかしくない。三年間もの逃亡生活とはいえ、彼女ほどの実力持った魔法士ならば逃げ切れるはずだ。それが今、最後の砦ともいえるこの日本に戻ってきた。天城紫

乃も彼女がそれなりの窮地に追い込まれているのだと察しているようである。
「私、色んな国に行ったわ。欧州、北米、南米、果ては中東までも逃げて。とにかく隠れる場所はたくさんあったけど問題が起こりまして」
リニアは頬を掻きながら困ったように師匠を見上げた。
「……ハンスがくる」
「ハンス・ブリーゲルか」

―ハンス・ブリーゲル。有名な教会幹部のボディーガードであり、執事で名を知られている。警護のための魔法を取得しているため、典型的な実用主義者だ。実戦にも優れていると定評がある。そして何よりリニアは父親との仲が悪く、彼はリニアの父親代わりであり、お互いに信頼し合っている仲であるはずだ。

「リニア……あなた、何やらかしたの」
天城紫乃は頬を引きつらせるしかなかった。すると彼女は苦笑したまま答えた。
「実は父との仲がついに壊れちゃって。あの三年前の事件。先生の弟子である私が協会の要請で色んな所に派遣されたじゃない？　まあ結局最後までやらずに放棄しちゃったんだけど。そのことで協会側からたくさん尋問させられて……でもあの人は私を助けてくれなかった。それで仕方なく協会から抜け出して、現在に至るわけ」
天城紫乃は本日、何回目かの深いため息をついた。
「リニア……あなた、ここ三年間の間に何回か遊び来てたでしょ。そんなことになってい

たなら何で言わなかったんだ。私が介入したら、師匠としていくらか助けられたっていうのに」
「先生、私の性格わかってるでしょ？」
「……そうね」

＊＊＊

目の前で明るく笑っている馬鹿弟子に、また私はため息を零してしまう。彼女は現在の自分の状況が本当に解っているのだろうか。しかし、こんな風に笑っていても三年間逃げ続けていたのは事実のようである。いくら師匠と言えども、遠く離れた弟子のことは解らない。予知能力などもない。私は弟子がこんな状況だったということを今まで知らず、呑気に旅でもしているんじゃないかと思っていたのか。そう思うと、私も少し申し訳なくなってくる。三年前の事件以降、情報収集活動を絶ったせいでこんな結果になるとは思ってもみなかった。
「つまりお前を処理するために、ハンスが追ってきているってことね？」
「そういうこと」
ハンスのこととなると、依然として乾いた笑顔に戻るリニア。
よりにもよってハンス・ブリーゲル。大物過ぎる。私が直接介入すればすぐに収まるのだが……第一次著作事件の時、協会内部の問題には手出ししないという契約にサインをしてしまった。もちろんそんな契約ひっくり返してもいいのだが、そうすると協会からの支援

金が絶たれてしまうのは考えるまでもない。
「うーん……」
師匠が難しい顔をしているというのに、この馬鹿弟子はニコニコと笑っていた。
「リニア、あなたはこれからどうするの？」
「一応、しばらくは今まで以上に身を潜めておくつもり。この地は協会の不可侵領域だからハンスも勝手はできないでしょう。」
「いくらここが不可侵領域だとしても、私が対応しづらいんだけど」

そもそもリニアは、金色の魔女である私の弟子。協会もそれを知った上で、何故ここまで執拗に彼女を追っているのか。やはり本当の父親の方が協会内部の紛争を起こそうとしているとしか考えられない。そしてハンス・ブリーゲルは主である彼の命令なら必ず遂行するだろう。
私がこの紛争に露骨的な介入をすることは非常に難しい。しかし、事の重大さだ。葵くんの手に負える問題ではない。そもそも彼は他の案件に忙しい。赤城周にしてもリスクがでかすぎる。残りの子たちも……無理だろう。結局、私がやるしかないのか？
「お前は……何で来るたびに事件を持ってくるんだ」
「もちろん、私はトラブルメーカーだから。トラブル作ってなんぼのもんよ」
私の愚痴を受け流し、リニアは楽しそうに笑っている。
「それ自慢できないわよ」
「そう？」

「とにかく。せっかく来たんだからゆっくりしていきなさい。私がどうにかしてあげるから」
さて、どうなるか。このまま考えていても仕方がない。ひとまずは何か事が起こってから考える方向にしよう。
「ああ……私はどうしてこんな優しいんだ」
「それ、ナンセンスね」
「え」

瞬間、玄関の方で音がした。

＊＊＊

買い物から帰ってきた奏は玄関に見慣れない靴を見つけ、その足で執務室へと向かった。両手に大きな袋を提げたまま、中の様子を窺う。そして扉を開けると、銀色の髪が目に入った。
リニア・イベリンだ。
以前から面識のある奏は警戒することなく、ただきょとんと彼女を見つめていた。そんな奏の視線に気づくと、リニアは彼女の前に屈み、にこりと笑いかけた。
「久しぶりね、奏ちゃん」
「リニア」

「元気だった？ ご飯はちゃんと食べてる？」
「うん。元気」
「そっか、それなら良かった」
「うん」
奏はいつも通り口数は少ないが、嬉しそうな雰囲気が感じ取れる。色々と訊ねてくるリニアの態度に嫌がる様子も見せない。それもそのはず、三年前の拉致事件で奏を助けたのは彼女だ。
「そういえば、奏ちゃん大きくなったね？ いくつになったの？」
「十歳、今は五年生」
「へえ、もうそんなになったの」
「リニアは何歳になった？」
「奏ちゃん!レディーの年はむやみに聞くものじゃないわよ」
「……れでぃー？」
「うん、レディー」
首を傾げる奏。つい天城も口を挟む。
「それ、ナンセンスじゃない？」
「え!?」
部屋に響き渡る笑い声。師匠と弟子の三年ぶりの再会、リニア・イベリンの帰国。ここから彼らの日常生活は、逃れることのできない大きな渦へと巻き込まれていくことになるのだった。

***

ハンス・ブリーゲルはあまり表に出ることが好きではない。そんな彼にとって、秘密集団のボディーガード兼秘書とは適職といえよう。彼は主人の命令とあれば、文句なしに仕事を行う。そんな彼に下された命令の一つに主人の娘の世話というものがあった。十年以上に渡り、少女の世話をしたハンス・ブリーゲルには、本人も知らぬうちにリニア・イベリンに対して本当の娘のような愛着を感じていた。

そこに今回の「リニア・イベリンの抹殺」という命令。あまり気乗りしないのも当然だ。

しかし、彼は公私の感情の区別ができるプロである。主の命は絶対。

あらかじめパスポートやビザなどは教会から発給されていたため、日本へ来ることは簡単だった。後は彼女を見つけ出し、処理するだけである。

元々リニアは彼から体術を学び、金色の魔女から直々に魔法も教わり、逃げることには長けていた。当時は教会の上層部もここまで彼女に気を使ってなかったので、目をつぶっていた。

しかし以前から何度か彼女が金色の魔女と接触していた事実を把握しており、ついに協会側もハンスを派遣するに至ったわけである。そしてついにリニアの方も危機感を感じたのであろう。彼女は日本、現存最高の魔法士、天城紫乃の元へ助けを求めに逃げてしまった。師である彼女が協会側に対し、何か仕掛けてくるに違いないのである。

「やれやれ自らが育てた子を、自らの手で処理しなければならないのか……上層部も中々に性質が悪い」
ハンスはポケットから煙草とライターを取り出した。金属製のライターに映る彼の顔はあまり良いとは言えない。彼は煙草に火をつけると歩き出した。
空港を出ると協会側の人間が黒い車の前に立っていた。互いに軽く目礼を交わすと、彼はハンスにスーツケースを渡した。
「それでは幸運を祈っております」
「ああ、最善を尽すつもりだ」
ハンスは車に乗り込むと空港を後にした。

＊＊＊

「―だから、早く来てくれってどういうことなんだ」
『いいから早く来なさい。色々と話さなければいけないのよ』
図書館で勉強している最中、突然の電話だった。幼稚園にはたまに夕食を食べに行く程度で、しばらく俺は穏やかな日常を送っていた。だから今日、こんな風に先生から電話来ること自体久しぶりすぎて驚いている。そして、電話口の彼女の声は珍しくイライラしていた。
「嫌な予感しかしない」

彼女の声とは別に、後ろの方で騒がしい音もしていたし、何よりあそこまで機嫌の悪い先生もめったにない。

―まさか。

あまり行く気がしないが仕方ない。返事をする前に電話を切られてしまったので、仕方なく出かけることにした。ついでに夕食もご馳走になってこよう。

外に出ると、どんよりとした雲行きに更に気力が削がれる。図書館から幼稚園まではバスに乗っていくしかない。まるで全てがあの魔女に味方をしているかのように、バス停に着くとすぐにバスが来た。乗客は少なく、俺は一人掛けの席に座りぼんやりと外を眺める。下校途中の学生や買い物帰りの主婦、犬の散歩をする老人。外の世界は非常におだやかな日常が送られていた。俺も普通の日常を過ごしたいのにな。

幼稚園に着くと、俺はいつものように執務室へとまっすぐに向かった。玄関に見慣れない靴があったが、俺は楽観的に努めて『奏の新しい靴』と捉えようとしていた。

しかし―、

「久しぶり!」

「……」

やはり違った。
先生のそばに立っていた女。それは伝説のトラブルメーカー、リニア・イベリンだった。
ついに災いの権化とも言える女が来てしまった。
「なにその反応。久しぶりの再会なんだから、少しは喜んでよ」
「喜ぶところか？」
「そう、喜ぶところよ」
「全然嬉しくないのに、どうやって喜べと」
俺が入口で立ち尽くしていると、リニアが思い切り抱き着いてきた。無理やり退けようにも、俺も男である以上躊躇ってしまう。結果、俺は成す術もなく彼女のいいように頭を撫でられるしかなかった。別に嫌ではないが……複雑な心境だ。
「そうちゃんも大きくなったねー。雰囲気も男らしくなっちゃって!」
「……そうちゃん呼ぶな」
「ほんと、昔と大違い。立派になっちゃたのね」
「……」
「でも、そうちゃんは相変わらずかわいいねー」
お気楽そうに笑うリニア。いい加減、ずっと抱きしめられているこの状況が気恥ずかしくなってきた。
「ええい、もうあっちいけ!!」
リニアの腕を掴んで向こうに押し返すと、彼女は頬を膨らませて拗ねた表情した。
「もう。レディーに対して失礼だよ」

ん？今『レディー』とかいう単語が聞こえたような？気のせいか？気のせいだよな。

「それで、リニアは一体いつきたんだ？」
「今日。正確には今日の朝方」
「ずいぶん早い到着だな」
「まあ逃亡中だから」
「は？」
まるで大したことでもないように答えるリニア。逃亡中……？
「詳しいことは先生が教えてくれるよ」
リニアから面倒ごとを丸投げされた先生は非常に疲れた顔をしている。こんな先生の姿はめったに見ない。まるで人が変わってしまったかのようだ。

そして先生は事の顛末を話し始めた。

「つまり……三年間逃げ続けて、ついに逃げ場所がないから先生のもとにやってきたってことか」
「うむ」
あっけらかんと肯定するリニア。先生と同じで俺も彼女がそんな状況下だとは全く思わな

かった。そして今もこうしている間に、この女には危機が迫ってきているということだ。
本人は気にしている素振りを見せないが。

—今回の件は非日常すぎるな。

「とりあえず、リニア。がんばって」
すると彼女は再び俺に抱き着いてきた。
「そんな他人事みたいに言わないでよ」
「いや他人事だし」
「私にとっては、そうちゃんは他人事じゃないよ。私、そうちゃん大好きだから!」
「あ、はい。そうですか」
もう抵抗するのも面倒くさくなってきた。そもそも空腹で抵抗する力も沸かない。
「それより夕飯はいつ食べるの？」
「奏ちゃんが用意してるから、もうちょっと待って」
「あー、早く奏ちゃんの料理食べてみたいな!」
こいつら……。
「成人女性二人もいるのに、子供に料理させてんのか」
俺が呆れた声を漏らすと、二人は顔を見合わせて答える。
「だって私、料理できないもの」
「私も料理できない」

この師匠あって、この弟子ありってことか。

＊＊＊

『仕事だ』

綺麗に整頓された部屋に響く声。それは机の上のパソコンから聞こえてきた。

画面には奇妙な風貌をした金髪の青年が映っている。「奇妙な」というのは、青年にはその若い顔立ちには似合わない立派なひげが生えていたからだ。彼は威厳のある雰囲気を醸し出したまま言葉を続ける。

『ハンス・ブリーゲルが動いた。君も動き始めなさい』

パソコンの前に座る少女はその名にぴくりと反応した。魔法士の間では有名な男。彼女にとって最強の相手と言えるであろう。

『奴が動いたということは、リニア・イベリンが日本に戻ったという証拠だ。再びingが起こる可能性が高いだろう。直接調査をしてこい。いざとなれば彼女を抹殺しても構わない』

リニア・イベリンの抹殺……？

少女は疑問を抱いた。

—ing自体は彼女と関係がない。むしろingの覚醒を促すには、鈴木聡太を拉致する方が賢明ではないのか。

『議会で決定したことだ。君の性格上、色々と疑問を持っているだろうが議会は君が思っているほど賢明じゃない。君はただ言われたことをすればいい』
青年の態度からして、彼はこの少女の上司のようだ。
『我々の計画はingの覚醒を誘導するものだったが、この組織も疲弊してしまっている。金色の魔女との一騎打ちには協会の勢力が邪魔だ。今回の件で協会側との形勢を逆転するつもりだ。健闘を祈っているよ』

そして映像が終わった。パソコンの前に座る少女はため息をついた。今回の件は彼女にとって重要度が大きい。長期的なing覚醒計画のため彼女はこの都市に来た。潜入に数カ月かかり、人目に付かず行動するためにまた数カ月かかり、ちょうど一年近く経った今になって、計画がまた白紙に戻ってしまったようである。
少女が所属している組織「研究所」は数人の研究員が交代制で構成される議会が最高本部であり、この議会の決定により本部全体が動く。そして少女はこの研究所で造られた存在だ。いくら下された命令に納得できないとしても、本体に組み込まれた研究所への忠誠機能により必ず実行しなければいけない。

ふと、彼女は同志とも言える友人を思い浮かべた。

―真田ちゃんならこういう状況でも躊躇いなんてないのだろう。

幽霊事件以後、研究所内部で離脱者とされている彼女は現在密かに身を隠している。
―今回の件で手柄を取れば、私の進言で彼女の件は赦されるかもしれない。
少女は立ち上がり、戸棚を開いた。そこには派手な服がたくさん掛けてある。その中の一つを選んで着替えると外出の準備をした。
少女――、ノエルは研究所のため、そして友人のため、任務を遂行するのであった。

＊＊＊

「奏、手伝うよ」
俺が台所に入ると、奏は手を止めて振り返った。可哀そうに。世話する大人がまた一人増えるなんて。奏に向かい軽く黙とうをすると、彼女は小さくお辞儀を返してくれた。そして一緒に夕飯の準備をする。
「そういえば、奏さん。今日はずいぶんと楽しそうですね」
「うん」
普段なら黙って頷くだけだが、今日は返事を返してくれる。よほど機嫌がいいのだろう。
タンタンタン

心なしか具材を切る音さえ楽しげに聞こえる。
「何かあったのですか？」
「うん。リニア、帰ってきた」
そうか、そういえばこの二人はとても仲が良かった記憶がある。そもそも三年前にリニアが奏を救ったのだし、当然といえば当然だけど。
「じゃあ、今日はお祝いしなくちゃな」
「うん。今日はお肉いっぱい使う」
嬉しそうに調理する奏を見ていると、リニアの帰国も悪くないような気がしてきた。厄介事さえ持ち込まなければ、俺だってリニアはそこまで嫌いじゃない。
何故なら、彼女はとんびに似ていた。
根本的な部分は違えど、あの持ち前の明るさはどこか似ていると思った。もちろん今となっては、ただの学生時代の思い過ごしのようなものではあるが。あの余裕のなかった時は本当にそう思っていたのだ。過去の恥ずかしい想い出のようなものだ。
「ご飯」
「え」
「ご飯まだ？」
頭に思い浮かんでいた顔がすぐ横にあった。リニアだ。
「まだまだ。早く食べたいなら手伝ったらどうだ？」
「だから料理できないって」

「じゃあ、大人しく待ってろ」
肩に乗っかる顔をどけると、リニアは反抗するかのように後ろから抱きついてきた。
「いつ完成するのー？」
「あと少し」
「そうちゃん、料理できるなんてすごいね」
「こうみえても自炊歴二年目なんで。たいていの料理はできますけど」
皮肉をこめて言ったものの、彼女は呑気に笑っていた。
「私なんてお腹に入ればみんな同じだと思っちゃうから、料理に必要性を感じられないんだよね」
その後もリニアは暇なのかずっと俺に抱きついたまま、ちょっかいを出し続けてきた。
「もう……あっちで大人しく待ってろ!!」
「えー、ひどいじゃない。私、そうちゃんのこと大好きなのに」
「分かったから、向こうに行っといてくれ! 気が散る!!」
俺だって健全な男子学生なのだ。いくらリニアとはいえ、女性にずっとくっつかれていたら集中できるものもできない。

ふと、奏が俺たち二人をじっと見ていることに気付いた。
「奏？」
「……」
何も言わない。

「どうかしたか？」
「……別に」
ふいっと顔をそむけると、奏は再び調理に戻った。いくら鈍感な俺でも彼女が少し不機嫌になったのはわかる。調理をさぼって煩くしてしまったせいだろうか。全く、このトラブルメーカーめ。文句を言おうと後ろを振り向くが、リニアはとっくに台所から姿を消していた。

夕飯はバーベキューパーティーをすることになった。俺はホットプレートに火をつけ、食材を乗せていく。牛肉、豚肉、鶏肉、たくさんのお肉と野菜。正直四人分にしてはかなりの量に思える。まあ、この獲物を狙うかのように構える大人二人がいるには充分だろう。二人とも焼き加減がよくわからないため、じっと俺のＧＯサインを待っている。リニアに至ってはビール片手に構えているので、零しそうで心配だ。
「お、この肉はもういいと思……」
俺が言い終わる前に二人は動いていた。初戦は先生の勝ち。さすが先生、大人気ない。二枚目の肉も焼けそうだった。どうやらリニアも目をつけており、俺の言葉を今か今かと待っているようだ。
「これもそろそろ……」
俺が喋り出すや否や、リニアは動いた。

――しかし。

「はい、奏」
俺は焼きたての肉を奏のお皿へとすかさず置いた。それをリニアに盗られる前に素早く口に含む奏。中々の連係プレーだ。
「そんな」
がくりと肩を落とすリニアだったが、当たり前だ。
「子供が優先に決まってるだろ」
そんな様子を見て、笑っている先生。いや、あんたが一番年とってるんだから自重すべきなんだがな。先生にも一言言いたがったがお金を出してもらっている以上、見過ごしておこう。というか、年の話をしたら殺されそうだ。

半分くらい食べ終わった頃だろうか。焼き加減を見ている最中、先生が不意に口を開いた。
「私、こう見えても本当に幼い頃から希代の聖女様扱いされてきたから、料理したことないのよ。周りの人間が知らずとおいしいものを提供してくれていたし。その後も幽遊ちゃんや奏ちゃんが食事を用意してくれたから、実は一度も台所に立ったことないのよね」
「ほう……」
話し半分に聞き、俺は適当な返事をしておく。人間、生きてきた環境に大きな影響を受けるのは明らかなんだな。堂々と料理できない宣言をする女性も中々いない。やはりこの二人は普通ではないと実感した。
「ところで、こんなのんびり飯食ってるけどリニアの件は大丈夫なのか？」

「多分、露骨的な攻撃はしてこないと思うから大丈夫じゃない？」
俺は真面目な態度で先生に尋ねるが、彼女は肉を食べながら返事を返した。せめて食べ終わってから話してくれ。
「何か考えがあるのか？」
「いや、何も思いつかない」
思わず拳を構えてしまった。そんな俺をなだめるかのように、奏が俺の肩をたたいた。
「諦めて」
ああ、そうだ。この女はそういうやつだった。大体、俺には関係ないことだ。ただ何か悪いことが起こるのは避けたかっただけである。
「大丈夫だって…」
そんな俺の心情を知ってか知らずか、随分酔いが回ったリニアが肩に手を回してきた。
「ハンスは私の父親みたいな存在なんだから…偶々、仕事の関係上ちょっとぶつかるだけよ。どうにかなる、絶対。こんなとこで悩んでいても仕方ないんだから、今はただ目の前のお肉をおいしいと思っとけばいいの」
そう言って俺の口に肉を突っ込むリニア。
うまいな。
「それより私が三年間どんな生活していたのか話してあげる」
そして彼女は一人で勝手に話し始めた。酔っ払いを無視して俺は思う存分を肉を食べる。
奏に秘伝のタレを作ってあげると、彼女はそのタレが気に入ったらしく満足げな表情を浮かべていた。

「先生もタレいるか？」
「いや」
先生は静かに首を振ると、煙草を取り出した。
「何だよ、煙草なんて吸うのか。初めて見た」
先生が火をつけると、煙は外に惹かれていくかのように窓の隙間を逃げていく。
「以前、第一次著作事件というのがあった」
「何だそれは」
先生は近くの器に灰をこぼして続ける。
「封印を解かれて直後、一銭もなかった私は魔法士協会に乗りこんだんだ。『私が魔法を構築したんだから使用料を払いなさい』って」
「うわ。いくらなんでも横暴すぎないか」
「横暴じゃないわよ。私が構築したのは事実だし、魔法書も私が制作したんだから最低限の著作権料はもらうべきでしょ」
「確かに納得できなくもない」
一応、先生も作者ってことになるのか。
「それで法的処置も辞さないって言ったら向こうも動揺してね。魔法そのものが世界に明るみになってしまうから。そこで色々と話し合った結果、魔法士協会との間にいくつか細かい協定ができたの『魔法士協会内部のことには一切関わらない。代わりに魔法士協会側は著作権料として一定の支払いをする』って。私はそのお金で幼稚園の維持をしているよ

うなものなのよ」
「……もし協定を破ったら？」
「もちろん」
続きは言うまでもないようだ。
「つまり、あんたは迷ってるってことか」
「さあ」
はぐらかす先生だったが、その視線は奏とリニア、両方を見ていた。一人の子供を養うには経済的な支援が必要である。協会からのお金を絶つわけにはいかない。しかし、弟子を見捨てることもできないのだろう。さっきは二人が近くにいたから適当に答えていたのか。先生も色々と考えてはいたんだな。

「ねえー!! 二人で何話してるの？」
再び、リニアが抱きついてきた。先ほどより赤い顔をしている。かなり酒が入っているようだ。
「ねえ、そうちゃん。教えて」
リニアは頬をすりすりと寄せてきた。
「やめろ、馬鹿」
「私は馬鹿じゃないよ。リニア! リニア・イベリンよ!!」
「わかった、わかった。いいから、向こう行ってくれ」
「むう……この男、空気読めないわね。ねえ、リーちゃんって呼んで! リーちゃん」

「おい、奏もいるんだ。いい加減にしろ、酔っ払い」
「なに、そうちゃん。こういうの嫌いなの？」
「別に嫌いでは……いいから、向こう行け」
「もう！このダイナマイトボディのお姉さんをよく見なさい！本当に向こう行っちゃっていいの!?」
俺はリニアを無視して再び肉を焼き始めた。
「ん？」
気づくと、また奏がじっとこちらを見ていた。先ほどまで嬉しそうにお肉を頬張っていたのに、今はなんだか不機嫌に見える。
「奏……どうかしたか？」
「……バカ」
「は!?何で!?馬鹿はこいつだろ」
「うるさい」
……やっぱり今日の奏はよくわからない。

「それで、どうするつもりなんだ？」
寝落ちしたリニアを隅にやると、俺は先生の元へと戻った。先ほどは冗談を言っていたが、今ならちゃんと答えてくれるだろう。先生は偽物っぽい笑顔を向けてきた。
「助けてくれる？」

「どうやって」
「私は今回、表立って動けないから君がリニアのボディーガードをしてくれたらいいな」
「俺なんかより、リニアの方がよっぽど強いぞ」
「それでも一人より二人でしょ？」
その笑顔はなんか腹立つな。
「……まあ、本来なら断るところだけど、今回は事態が深刻みたいだから仕方ないか」
きっと奏も今回の件に関わらざるを得ないのだろう。俺はリニアより奏の方が心配だ。こんな大人二人には任せられない。
「わかった、その依頼受けるよ」

＊＊＊

慌ただしい宴が終わった。ひとしきり食べたのでお腹も心も満たされている。辺りを見回すと、先生もリニアも床に寝転がり、奏だけが黙々と片づけをしていた。俺も手伝うと声をかけたが、休んでいてと言われたので大人しくそうすることにした。
しかし、ただじっとしているのも勿体ない。かといって、奏に片づけを任せて俺だけ一人帰宅するというのも申し訳ない。
「コンビニでもいくか」
食後の運動も含め、先生たちに酔い覚ましの薬を買ってくることにした。
「どこいくの？」

出かける準備をしていると後ろから誰かが呼んだ。リニアだ。
「コンビニ。食後の散歩。お前は寝てろ」
「やだ。私も行く。酔い覚ましに外いく」
「まあ、別にいいけど」
幼稚園からコンビニまでの距離は結構ある。俺はぼんやりと光る街灯を眺めながら、夜風に身を任せる。この街にもずいぶんと慣れた。まるで地元のような気分さえする。
そっと空を見上げた。今日は雲が多くて月が見えない。辺りがいつもより暗いのは月の光がないせいか。俺は前に向き直る。まばらに置かれた街灯のせいで道の先は真っ暗だ。
ふと、俺は自身の将来を考えた。

―俺はこの先どうなるのだろうか。一生懸命に勉強をして、就職して、真っ当な人生を生きていくのだろうか。だとしたら、きっとそこには不満なんてない、理想的な将来だ。目標も理想もない方が賢く生きていけそうだ。中途半端な理想主義より、無難な現実主義の方が俺には向いている。

「……何が起こるかわからないのに、今から考えても仕方ないか」
先ほどの大人二人の意見を参考にする。あの人達もたまには役に立つのかもしれない。ちらりと隣を見た。先ほどから、よたよたと危なげに歩くリニア。まるでゾンビのようだ。
「そんな酔ってるんだから大人しく寝てればよかったのに。何で来たんだよ」
「そうちゃんと、一緒に……行きたかった」

途切れ途切れに喋り、ついにリニアは俺に寄り掛かってきた。不覚にも、一瞬どきりとしてしまう。ふわりと香る、女の匂いとやらが妙に鼻をくすぐった。
「べ……別にそんなこと言っても、俺は惚れないぞ」
「あらら、それは……残念」
軽口を叩くリニアだったが、彼女はもう歩けそうにもなかった。俺は近くの公園に寄ると、ベンチに彼女を座らせた。やれやれ、しばらくここで休んでからいくか。

「あの」
どこかで子供の声がした。振り返ってみるが誰もいない気のせいか。
「お兄さんね」
すぐ目の前で声がした。女の子。奏より少し成熟した、六年生か中学一年生くらいの女の子が立っていた。年齢にそぐわない、含みのある笑顔で笑っている。嫌な予感がとてもする。さっさと交番に預けてしまおう。
「どうしたの、君？　家出？」
「……」
少女はどこか不満そうな顔をしたまま黙っている。よく見ると、彼女の服装はテレビや雑誌で見たような服。とても高級そうだ。お金持ちの御令嬢にも見える。
この辺は団地住宅地だから隣町から来たのだろうか。沈黙が俺を妙に緊張させる。
「えっと。どうして俺に話しかけたのかな？」
「……」

「俺、ちょっと今は忙しくて……」
「お兄さんは、運命についてどう思う」
「え？」
風がざあっと通り抜けかのように思えた。よくわからないが冷や汗までも出てきた。
「人生とは何？」
「あの、ごめん。ちょっと俺には何を言ってるのか、さっぱりで……」

バンッ

隣で音がした。どうやらリニアの頭がベンチに当たった音のようだ。
再び前を向くと、
「あれ？」
少女の姿はなかった。まるで何かに化かされたような気分だ。
「俺も酔っ払ったかな」
「いたた……あれ、ここどこ？」

先ほどの衝撃で目を覚ましたリニアをつれ、コンビニへの道を再開する。
「ほら、あとちょっとなんだから……ちゃんと歩いてくれ」
「わかってるって」
そう言いながらも、彼女の足元はふらついていた。

「……リニア、無理そうならここで待っててくれ。すぐ戻ってくるから」
「嫌だ! それは、嫌。一人は……寂しいから、嫌」
いよいよ、面倒臭くなってきた。
「……じゃあ、おぶるから。乗ってくれ」
「……うん」
多少、歩きにくさはあるが仕方がない。俺はリニアをおぶったままコンビニへと向かった。
「こんな姿、葵に見られたら一生ネタにされるな」
「え？」
「なんでもな……」
次の瞬間、先ほどとは比べ物にならないほどの悪寒が全身を通り抜けた。

――やばい。

直感が脳に危険信号を送る。目の前からもの凄い視線を感じた。目をこらして見ると、まるで夜の闇に溶け込むかのように道の真ん中に黒ずくめの男が立っていた。
「五年前、ある少女がいました。ある日、少女は自分の道を生きると言って家を飛び出した」
抑揚のない声。まるで機械が話しているかのようだ。男は続ける。
「そして五年が経った」
男は一呼吸置くと、やっと感情が宿った声を漏らした。

「リニア・イベリン。素敵な名前だな」
それは寂寞感で満たされたような声。
「私が自分でつけたんだもの、綺麗な名前でしょ」
「君の性格にぴったりだ。モーターの名前をとってくるとは」
「違う、これは植物の名前よ」
「ほう」
真剣な表情で答えるリニアだったが、彼女は未だ俺の背中におぶさったままである。おかげで少し緊張が解けた。
「もう大丈夫、おろして」
「ああ」
リニアは俺の背中から降りると、簡単なストレッチを始めた。どうやら酔いは完全に覚めたらしい。
「本当にハンスが来るとは思ってなかったわ!」

―ハンス!? この男がハンスなのか!?

ハンスと呼ばれた男は、身動き一つすることなく丁寧に答えた。
「ええ、私もこんなことになるとは思いませんでした。少々、驚いています。あなたを育てたのは私自身ですから」
「そうね、あの人は自分の子供を見捨てて、全部あなたに押しつけたんだから」

「ですが、あなたのお父様は私の御主人ですから。主の命令は絶対です」
「へえ、あなたってそんなに型物な人だったっけ？」
「私も月給を戴く身でして」
声には出さずとも、互いに口角を上げて笑い合う。
「じゃあ、私を処理しに来たってことね」
「はい、お嬢さま」
「お嬢さまなんて久しぶりね、そうちゃん聞いた？私も本当にお嬢さまなのよ？」
こいつ。緊張感がないのか、あえてこのような態度をしているのか。

ハンス・ブリーゲルはじっと俺たちを見据えていた。俺は最大限に警戒しながらポケットの中を探る。畜生、紙が足りない。護身用に財布の中に入れておいた数枚しかない。これじゃ、ボディーガードにすらなれない。ただの足手まといだ。
俺の焦りが伝わったのか、リニアはいつもの笑顔で笑いかけてきた。
「大丈夫よ、私が守ってあげるから」
「なっ……おい、それは男が言うべきセリフだろ」
彼女の一言ですっと心が落ち着いた。そうだ、いくら使えないとはいえ、何か方法はある。
こっちは二対一だ、勝機はある。
唐突にハンスが口を開いた。
「魔法使いに勝つことができる最善の方法」
「それは魔法を使わないこと」

反射的にリニアが答えた。
男は続ける。
「その最善の方法を超える方法」
「相手が魔法を使えないように阻止すること」
再びリニアが間髪いれずに答えると、男は小さく笑った。
「基礎は覚えているようですね」
「ああ、昔から何回もハンスに言い聞かせられたからね」
雑談を交わし合う二人だが、空気は一触即発だ。
「上層部の、あの人が下した命令は何？」
「魔法士、リニア・イベリンの除去。ただこれだけです」
「あのクソ親父……」
リニアは拳をきつく握りしめた。二人が集中している中、俺は財布の中から慎重に紙を取り出す。
「ほう、君が鈴木聡太か」
「っ!?」
―俺を知っている？
「あれがingの本体とは。思っていたより普通だな」
彼は俺の反応なんか無視して淡々と呟く。

—ing？ 何だ？ こいつは何を言っているんだ？

「お……おい、あんた!! それ、どういう意味だ!!」

「先手必勝っ!!」

リニアは胸元に仕込んでいた紙を勢いよくハンスに向かって投げる。紙に書かれた複数の文字が輝き始め、一気にハンスを襲った。稲妻や炎、水流が同時に発生し、彼の姿が視認できないほど煙が立ち込めていた。

「やれやれ……」

煙が徐々に晴れていく。ハンスは無傷で、まるで砂を落とすかのように手をはたいていた。

「魔法使いに勝つための最善な方法、それは魔法を使わないこと。私の教えとは異なりますね」

男はすばやい動きで服の中に潜ませていた拳銃を取り出した。俺も必死でそのスピードについていく。彼が引き金を引いたのと、俺が『曲がれ』と書いた紙を投げたのは同時だった。幸いにも、俺の紙は弾丸に当たった。奇跡かもしれない。弾はリニアを避けて、壁に穴をあけた。

「バカ!! 気をつけろ!!」

俺の忠告にも関わらず、リニアは舌を出して笑っている。

「まあまあ、ピストルに消音機までつけて……さすがプロね」

リニアの称賛にハンスは眉ひとつ動かさない。ただじっと彼女を見据えていた。

「勝つための喧嘩では僥倖を狙ってはいけない。これもまた私が教えた指針とは異なりますね」
「それを知っていて、何であなたは暗殺しなかったの？」
「……」

＊＊＊

一瞬の静寂の後、リニア・イベリンは物凄いスピードで前に飛び出た。狙うは男の腹部。1、2、3と右足で連撃を繰り広げ、そのまま左足で男の顎を思い切り蹴り上げた。
ハンスは唇の端から零れる血を拭い、数歩後ろに退く。しかしリニアの攻撃は止まない。彼女はハンスとの距離を一気に詰め、今度は腕を狙う。リニアの重たい蹴りを両腕で受け止め、男の動きは鈍くなった。そこを休むことなくリニアは攻め込む。

目の前で繰り広げられる超人同士の戦いを、鈴木はただ呆然と見つめていた。事実、彼にはリニアの攻撃を全て把握できていなかった。彼女の攻撃はあまりにも素早すぎて、ある程度の武術経験がないと目が追いついていけない程だ。

おそらく今までで一番重たいリニアの蹴りが、ハンスに入った。思い切り腹部に受けた彼は衝撃で後ろに追いやられるが―、彼は倒れなかった。
そして何事もなかったかのように、襟元を直して服をはたく。まるで痛みを感じないロボ

ットのように平然とした表情をしていた。対する、リニアも一切動揺を見せずに呼吸を整えている。いや、彼女の額にはうっすらと冷や汗が流れていた。
表向きは鈴木に笑いかけていたが、リニアは内心非常に焦っていた。彼女の目論見では、先ほどの一撃で相手を倒すとは行かないまでも、膝をつかせるつもりでいたのだ。

―これは中々、手ごわいわね。

＊＊＊

先ほどからリニアの攻撃はしっかりハンスの懐に入っている。格闘に詳しくない俺でも、彼女の一撃、一撃の重さは常人とは比べ物にならないほどだろう。
しかし、ハンス・ブリーゲルは倒れない。ましてや痛みを見せる表情もしない。
おかしい……あの銀髪の魔法士、リニア・イベリンの攻撃だ。いくらなんでも無傷のはずがない。何かを仕込んでいるとしか考えられない。

瞬間、ハンスは上着を脱いだ。俺もリニアも息を飲む。
彼が脱いだ上着には大量の拳銃と短剣が仕込まれていた。そして、ハンス自身の身体には記号のような文字がびっしりと書き込まれていた。
それを見てリニアの顔はより一層真剣なものへと変わる。やはりそうだ。彼の身体に書かれているのは魔法だ。おそらく防御魔法のようなものだろう。あれでリニアの攻撃を防い

でいたに違いない。なるほど、彼が言っていたのは攻撃に魔法を使うなと意味だったのか。勝負は攻撃と防御の使い分け。魔法を一切使うなという意味じゃなかったのか。くそっ、盲点だった。

「それでは、失礼いたします」

ハンスはリニアと同等の早さで距離を詰めてきた。しかし彼女のように猪突猛進ではなく、頭を使っている。彼は俺に向かって攻め込んできた。急いで躱そうとするも、達人に追いつけるわけがない。

鋭い痛みが腹に響いた。全身に電気ショックを食らったかのような痺れが走る。ハンスは俺に一撃を加えた後、そのまま方向を変えてリニアの方へと向かった。彼女は俺に気を取られていたのか、受け身が一瞬遅れてしまった。しかし、その遅れが命取りだ。ハンスの蹴りを上手く受け止められなかったリニアは、壁に向かって後ろへ大きく弾き飛ばされてしまった。

「……くっ」

リニアはなんとか態勢を整え直していたが、左腕を押さえている。

「けほっ」

瞬間、思わず俺の口から血が飛び出た。これが噂の鉄の味ってやつか。頭が非常に痛む。生きているということは相手が多少手加減をしたということだろう。いくら初期魔法とはいえ、俺の攻撃が邪魔になるのは明らかだった。一騎討ちに持ち込んで得意の格闘で勝負

する方が得策なのは当然だ。

態勢を立て直したリニアだったが、手傷を負って動きが鈍っていた。しかし、ハンスはそんな彼女の様子に構うことなく、全力で攻撃をしかけていく。数手まではなんとか捌き切っていたリニアだったが、左腕の痛みに反応が遅れてしまったのか、重たい一撃が彼女の脇腹に入った。勢いよく壁にぶつかり、リニアは悲鳴を上げる。

俺の視界も霞んできた。

「冗談じゃねえぞ……」

このまま気絶なんかしてたまるか。俺はまだ生きてる。

なら、まだやれることがあるはずだ。

考えろ……考えろ……!!

「一つ目のミス、相手の力量を正しく判断しなかったこと」

――ハンスは倒れこんだリニアの元にゆっくりと近づいていく。

「二つ目のミス、理論をそのまま鵜呑みにしたこと」

――一歩、そしてまた一歩近づいていく。

「三つ目のミス……いや、これは言わなくてもわかりますね。せめてもの、苦痛なくお送り致します」
「ふざけんな!!」
俺はハンスに向かって、全力で紙を投げた。
これで相手の動きを封じ込めさえすれば……
「私が君を無視したと思っていたのですか？とんでもない、君が一番の最大変数だから初めに消したのですよ」
男は腰に下げていた小さな短剣を二つ、俺に向けて投げた。
片方は俺の手に、もう片方は紙に吸い込まれた。
「勝手に……殺すんじゃ……ねえ」
痛みに慣れていないせいなのか、俺は霞んでいく視界に抗えなかった。

＊＊＊

「カミュはいつもぶらついていた。自殺と反抗の中で。光と闇の中を歩きながら、魂と肉体の間を。価値と存在の間を彷徨した男。『存在は本質より先にある』。私はこの言葉がとても素敵に感じた。本質は外にある概念や価値に基づいて規定されたことにすぎない。存在そのものが持っているものではない。我々は存在するから、ここにいる。本質なんてものは後付けにしかすぎない。私は本当に彼の哲学が好きだ」
「遺言はそれで全部か？」

「ああ」
「最後の言葉がアルベール・カミュか。笑わせるな」
「知っているか？『我々は人生に何か意味があると信じている。そのために人は理性をもったと言われている』。私は、この理論大嫌いだ」
「人間性を望んでいるのか？」
「まさか。そんなものはいらない」
「俺は……絶望しか待っていないと知りながら、何度も何度も岩を運ぶ存在が人間の真の姿だと思っている」
「ほう、その部分知っているのか」
「ああ、だいぶ前に友人が聞かせてくれた。それじゃあ……ここまでだ。御苦労だったな」
「虚無に囚われ自己を忘れる。それが人間の本性とは……これだから私は哲学なんてものは嫌いなんだ」

＊＊＊

「う……」
目を開けると、そこは見慣れた天井だった。
―今のは何だ？ 夢か？

「そうだ……リニアっ!!」
周囲を見回す。どうやらここは幼稚園のようだ。
お腹の苦痛と共に、今までの記憶を思い出す。あちこちに巻かれた包帯のせいで自己嫌悪に陥りそうだ。俺は無意識に拳を握ると、短剣が刺さった部分に痛みが走った。
「おはよう、鈴木君」
先生は雑誌を読みながら、軽く声をかけてきた。普段通りだ。普段通り過ぎる。
「先生……あの後どうなったんだ。リニアは？」
「外にいるわよ」
良かった。まだ生きている。外にいるということは、傷の方はそこまで深くないのか。
「……先生、心配じゃないのか？」
「声をかける役目は私じゃない」
そう言うと先生は、外を見ながら炭酸飲料を飲む。こちらからは彼女がどんな表情をしているのかもわからない。

コトン

扉が開く音がした。奏が痛み止めや飲み物など、たくさんお盆に乗せて運んできた。
「ああ、ありがとな」
奏はとても心配そうな表情を浮かべていた。胸がずきりと痛む。奏にもこんな顔をさせてしまうなんて。申し訳ないな。

「本来なら病院で数週間の入院ものだったんだけど、今回は私の知り合いに任せた。傷の治りも早いと思うよ」
「先生、医者の知り合いもいるのか」
「まあね」
彼女は大きく伸びをすると、奏が俺に持ってきた果物を食べ始めた。いつもの俺なら何か言っているだろうが、今はそんな気分ではない。
重苦しい雰囲気がこの部屋には満ちていて、とても居心地が悪かった。
「強かったでしょ？」
そんな中、先生は軽々と質問をしてきた。
「ああ……勝てなかった」
「当然だ、君が数十人で挑んでも一瞬で負けるだろう」
「じゃあ、数百人でいったら勝てるのか？」
「さあね」
思わず冗談をいってしまった。しかし先ほどよりは気が楽だ。
「今後、どうすればいい」
「さあ。私も彼がこんなに早く来るとは思わなかった」
先生は真剣な表情で外の暗闇を見つめる。
「……それも冗談か？」
「どうして？」
「幼稚園周辺はもちろん、この都市全体に結界を張っているのは知ってる。なら、殺気が

感じられたらすぐ反応するはずだ」
「そう、君が知っている通り結界は作動している。敵が殺気を出した時に反応する結界が。でも、反応しなかった」
「それはつまり……」
「どうだろうね。本人に聞いた方が早いんじゃない？」
先生は再び雑誌を読み始めた。もう彼女は何も言わないつもりなのだろう。
まだ少しくらくらするが歩けないことはない。俺は全身に訴えてくる痛みを無視して立ちあがり、玄関に向かう。奏が手を貸そうとしてくれたが遠慮した。いつまでも子供の前で弱っていられない。俺は彼女の頭をそっと撫でて、外に出た。

玄関を出ると、リニアが壁に背中を預けて立っていた。整った顔立ちの横顔は、俺に気付かずただ前を見ている。
「ひどい顔だな」
「え……あはは、そんな情けない顔してる？」
無理して笑っているのが丸わかりだ。彼女はかなりやつれた顔をしていた。
「とりあえず。お互い生きてたからよかったんじゃないか？」
「そう？ ポジティブすぎじゃない？」
「いいんだよ、無事に帰ってこれたんだから」

すると、リニアは大きな声で笑った。そして自身の頬を両手で叩く。気合いは充分入った

ようだ。いつもの表情に戻ってきた。
「やっぱり、私そうちゃんが大好き! うん、リニアの辞書に『絶望』なんて言葉はない、ただ前に向かって進むだけだ!!」
「突っ走りすぎるなよ」
「分かってるって」
このマイペースさ……リニアらしい。ひとまず彼女が元気を取り戻したようで良かった。
「リニア、あの後どうなったんだ」
一瞬、彼女は視線を落としたが、すぐに上を向いて拳を空に突き上げた。

「負けた」

一言。たった一言で質問に答えた。詳しいことは教えてくれなかった。
「……そうか。まあ、別に詳しいことはいいや。他人の家族関係とか面倒臭いこと、俺には関係ないしな」
「うん」
遠慮がちに笑うリニア。彼女の視線は先ほどからずっと、俺を見ようとしない。
「ただ……」
俺は一呼吸置いて言葉を続ける。
「ただ、俺はお前がいいやつだと思ってるから。横で黙って手助けするよ、あんまり力にはなってやれないとは思うけど」

訳もなく恥ずかしくなって、つい鼻を触ってしまう。何を緊張しているのだろうか。
ちらりと横を見ると、リニアが驚いた顔で俺を見つめていた。何となく、目線を合わせづらくて、俺がそっぽを向くと彼女は困ったように笑った。確かに嬉しさは感じられるのに、同時に参ったような笑顔だ。
「やっぱり、そうちゃん。格好よくなったね」
「……そうちゃん、言うな。それより今後はどうすんだ？」
「うん、ハンスは今日、昨日と同じ時間帯にまた訪れると言って去っていったわ」
「今日か……早すぎるな」
「処理するには早い方がいいってことね。そういえば、手。大丈夫？」
「ああ、平気だよ」
リニアに見せるように手を差し出すと、彼女は優しく俺の手をなでた。
「よかった。あの傷、だいぶ深そうに思えたから」
「もうだいぶ治ったよ」
俺は数回ほど手を握る真似をした。本音を言うと、まだまだ痛みが走っているが男の意地だ。
「さて。今夜来るって言うなら、とっとと準備をしなきゃな」
「準備？」
「俺はお前と違って武闘派じゃないからな。色々と作戦を立てないといけないんだ」
「あら、私は武闘派じゃないわ。レディーに武闘派なんて失礼ね」
「何がレディーだ、この怪力女」

「なんだと!?」
俺は何も問わなかった。ハンス・ブリーゲルがどのような思惑をしているのかさえ。
俺はただ彼女を助けることができればいい。ただ彼女が笑顔を向けてくれればいい。いつものように冗談を言い合えればいいのだ。余計なことを聞いて慰めるよりも、冗談を言い合って気を紛らわせるほうがいい。それは経験者である俺が何よりも知っていることだ。

＊＊＊

「腕が落ちましたね」
「そう？」
呼吸を整えるリニア・イベリンに対し、ハンス・ブリーゲルは涼しい顔をしていた。リニアは奥で倒れている鈴木に駆け寄りたいが、ハンスがそれを許さない。　彼女は悔しさに歯噛みするが、それでも笑みを絶やさず敵を挑発する。
「ねえ、ハンス。私、何か間違っている？　成長した娘が家を出るのは普通でしょう。あの人は一体何を考えているのかしら」
リニアの言葉を淡々と受け流し、ハンスは独り言のように話し始めた。
「五年……少なくとも五年前のお嬢さんは素敵でした。主人には内緒で、私から魔法使いを撃退する方法を教わったお嬢さん。あの頃はまだ魔法も習っていなかったですね。必死に体術を学ぶお嬢さんを見ていて、私は生き残る術として多くの技を教えました。私はお

嬢さんにいつまでも平和で元気に過ごしてほしいと……本当の娘のように思っておりました」
「私もハンスを父親のように思っていた」
「ありがとうございます。しかし、あなたは金色の魔女の元に行きました。魔法を学ぶために。少し裏切られたような気持ちになりました。そして同時にお嬢さんが主人の、『魔法士の子』だと悟りました。家を飛び出し、命と引き換えに魔法を学ぶ姿は、まるで魔法士の本能そのものでした」
ハンス・ブリーゲルは黙ってリニアを見据える。彼女は負い目を感じているのか、彼を見つめ返すことができなかった。

「三年ぐらい前、数年ぶりにお嬢さんを見かけた私は自分の目を疑いました。銀色に染まった髪に、非常に活気に満ちた表情。私が知っているお嬢さんではありませんでした。しかし、これが本来のお嬢さんだったのだと気付いたのです。ですから私は諦めました。私より金色の魔女の方がお嬢さんを正しく育ててくれると。私はただお嬢さんが協会のターゲットにならないよう動こうと。ところが三年前のing事件が起きた。今、協会はお嬢さんを必死に追っています」
ハンスは戦闘姿勢を解いて、黙ってリニアを見つめていた。
すると、突然彼女は大きな声で笑いだした。
「何でそんなに心配するんだよ、私はもう子供じゃない、誰よりも力強く前だけを見て走

る。誰よりも明るく、絶望なんてしない。私の人生は私のものだ。リニア・イベリンは銀髪の魔法士よ」
彼女は挑むようなまなざしで真っすぐとハンスを見返した。そんな彼女の様子を見て、ハンスも小さく笑う。
「鈴木聡太は協会内で主要人物として上がっています。いつ危険が迫って来てもおかしくない。本当に彼を守りたいのならば、命を掛けてください。私は銀髪の魔法士を処理しなければなりません」
「……本当に戦うしかないのね」
「はい、そのような覚悟も無しに自分の人生を決めたのですか？前だけを見て進んでください、お嬢さん。いいえ、リニア・イベリン」

そしてハンスは彼女に背を向けた。
「明日、同じ時間に私はまたここに来ます。生き残るためには、私を倒すしかありません」
ハンスはちらりと鈴木を一瞥すると付け加えるように言葉を添えた。
「手加減したので彼の傷は深くありません。まあ、手の方はやりすぎましたけど……大事には至らないでしょう」
「ハンス!!」
リニアの声に思わず彼は立ち止まった。そして振り返る。
「生き残ってくださいね、お嬢さん」
そう言い残すと、ハンス・ブリーゲルは夜の闇に消えた。

「あの……馬鹿っ!!」
複雑とした感情を胸に抱え、リニアは鈴木を背負い幼稚園へ向かう。

一方、団地から少し離れた場所の路地裏。
ハンスは壁に寄りかかりながら、煙草に火をつける。

―やれやれ、ネズミが一匹隠れていたな。

―いくら戦闘に集中していたとはいえ、最後になってようやく気付くとは。

―只者ではないな。

彼は煙草を口に加え、先ほどの方角を見返した。

―決戦は明日だ。

＊＊＊

研究所の尖兵であるノエルは、焦りの表情を隠せずにいた。まさかあのタイミングでハンス・ブリーゲルが乱入してくるとは思わなかったのだ。急いで身を引いたノエルだったが、

彼の気配に気づいていなかったら今頃死んでいるに違いない。研究所の者だと分かった瞬間、慈悲はないだろう。何しろハンスは研究所をひどく嫌悪していると彼らの世界では有名なのだ。

「このままじゃ引き下がれない……」

観察対象である鈴木聡太に顔を見せたところまでは良かったが、ハンス・ブリーゲルに感づかれてしまったことにより、彼女に課せられた任務の難易度は上がってしまった。

ノエルは一人、部屋の中で爪を噛みしめる。

「私は一体どうすればいい……真田ちゃん」

少女の顔には疲れが出ている。ノエルは膝を抱え込んで、顔を腕の中にうずめた。

――このまま時間が止まってくれれば。

「……っ!!じゃない。駄目だ、挫折しては駄目」

つまらない感情は捨てろ。それが研究所の教えだ。

自身を鼓舞してノエルは顔を上げる。逆に考えれば、協会側の人間と魔女側の人間をまとめて処理できる機会ではないか。

ノエルは無理やりにでも前向きに捉えることにした。

そして、再び昨日の場所へ向かう準備をする。

「真田ちゃんのためにも……!!」

彼女は友人のために、また任務のために戦場へ赴く。何が正しくて、何が正しくないのか。彼女には善悪の判断は必要ないのだろう。何故なら、そこには彼女の意志は存在しないのだから。

＊＊＊

時間というものは、案外早く流れるものだ。正確に且つ迅速に。ふと時計を見て浮かんだ言葉がこれだった。そして夕方になったと認識すると、俺は知らずに舌打ちをしてしまっていた。おそらく、俺もそれなりに緊張をしているのだろう。

包帯が巻かれた右手を見る。短剣が貫通したとは思えないほど、すっかり治っていた。医者がすごいのか、あるいは急所を外した彼がすごいのか。

「世の中すごい人間で溢れてるな」

他人事のように呟くが、内心気が気でない。いくら策を練ってみても確実に勝てる方法が浮かばないのだ。先生の手は借りることができない。そんなことをしたら奏を見捨てることと同じだ。

奏……奏の巫女の力を使えば、また解決策が浮かぶかもしれない。

「いや、駄目だ。絶対に」

奏を巻き込むわけにはいかない。きっと奏は自分より仕事を大切にするだろう。だから、奏をこんな危ないことに巻き込んではいけない。

「……葵のやつ、こんな時にどこで何してんだ」
頭に浮かんだ友人。彼ならば力になってもらえるはずだが、生憎、先日から連絡がつかない状態だ。以前から何度か音信不通はあったため、心配はしていないが腹立たしくはなってくる。
「あいつがいたら、いくらか勝算があるのに……ったく、必要な時にいないやつだな」
独り言が次々と出てくる。きっとストレスが溜まっているのだろう。周囲には誰もいない。ここは幼稚園の裏門だ。ぼうっと幼稚園の遊び場を見ていると、俺も幼稚園児に戻りたくなってくる。
「って、俺は何を考えてんだ」
また独りでに言葉が出た。
風が吹く。誰も乗っていないブランコがきいきいと揺れていた。
「多分、これも罪滅ぼしみたいなものなんだろうな……」
誰に訊ねたわけでもない、ただの独り言だ。
風が少しだけ強くなる。まるで風が俺の言葉を攫っていったかのように、胸がすっきりとした。
「全く……俺らしくない」
結論は出た。
「普通の方法ではまず勝てない。それなら」

俺は意識を集中して過去の記憶を思い出す。

あの非日常の日々を。様々な色の光線。剣戟の音。鳴り響く銃声。人生の唯一の汚点。今はあの日々を思い出して、答えを見つけるしかない。過去からは逃げ続けることはできないが、もしかしたらその過去は今なら役に立つかもしれない。だとしたら、それは大事な財産じゃないか。

俺は才能のない凡人だ。それなら、全てを出し尽さなければいけない。要らないものだと勝手に決め付けるわけにはいかないんだ。

瞬間、頭の中が一気にクリアになった。脳内の思考がまるで血管のように駆け巡る。

「そうだ……これなら……」

１００％とまではいかないが、いくらか勝率は上がった。充分だ。たとえ１％でも勝てる見込みが上がったなら、それだけで気力がわく。

「これが人間の知恵ってやつだな」

俺は立ちあがり、近くの石ころを蹴った。

「これだから魔法は嫌なんだ」

本当だ。本当に魔法は嫌だ。

＊＊＊

「さて、お嬢様。そろそろお時間ですね」
「あら! 先に言ってくれるってことは、私のことずっと気にかけてくれてたのかしら？嬉しい!」
返事をする前に、リニアが勢いよく抱きついてきた。最初は恥ずかしかったが、もうすっかり慣れてしまった。いや、慣れて良かったのか？
「はいはい……気にしてますよ。それより、リニア」
俺はリニアの抱擁を軽く流して、話を切り出す。彼女も俺の空気を察してか、すぐに身体から離れた。
「少々三年前に時間を戻そう」
「どういうこと？」
俺はポケットから大量の紙束と筆記用具を取り出した。
「あの時。俺たちが生き残れたのは、この紙とペンだけの簡易的な魔法のおかげだ」
「……そうね？」
リニアは首を傾げている。俺の意図することがまだ分かっていないのだろう。
「今回もこの方法で行く。事前に書きためておく、これなら昨日のようにはいかないはずだ。リニア、お前はただ戦闘に集中してくれ。後方支援は任せろ」
「なるほど。つまり、そうちゃんは私を守ってくれる騎士ってことね」
「あくまで後方支援だけどな」
「それでも私を守ってくれるでしょ？ 立派な騎士じゃない」
「……こんな時位、もうちょっと真剣になれよ」

正直『騎士』という言葉が気恥ずかしい。

すると、突然リニアがそっぽを向く俺の頬を突き、ウィンクと共に顔を近づけてきた。
「あえて真剣になる必要はないんじゃない？」
近づく顔のせいもあり、俺は何も言えなかった。
「何が起きたとしても、常に真剣に、気を張り詰め、集中して……。でも、必ずしもそんな必要はないと思う。笑ってても絶好調の時だってあるじゃない。緊張は死ぬ前にすればいい、というか本能的になるものだけど。だからさ、それまでは笑っていようよ！ 少なくとも、私はそうしたい」
眩しいくらいの笑顔が目の前にある。誰にも否定なんてさせないほど、清々しい程の自己主張。思わず、笑みが零れてしまった。
「んー？ お姉さん何かおかしなこと言った？」
「誰がお姉さんだよ。お前、俺より年上だったのか？」
「さあ」
予想通りすっとぼけるリニアだったが、そんな彼女の顔を見ていると自然と緊張の糸がほどけてきた。
「とにかく。俺がお前を最大限守ってやる！ だから、絶対に勝てよ！！」
「うん！！ 私たちは絶対に生き残って、２人揃ってここに帰ってくる！」
「……フラグを立てるな、フラグを」
リニアは楽しそうに笑みを浮かべ、くるくると踊り始めた。決戦前だとは到底思えない表

情だ。
―リニアを絶対に死なせたくない。いや、絶対に死なせない。
「……明日も、みんなでご飯食べよう」
「え？」
驚いた顔で振り向くリニア。いや、俺の方がもっと驚いている。無意識に口から言葉が出てきた。
「あ……いや、だから。明日も四人でご飯食べたいって思って」
一瞬の間が空いた後、堰を切ったようにリニアが笑いだした。
「なんだよ。そこまで笑わなくても。俺は真剣に」
「ああ、ごめん。つい……」
リニアは笑いすぎて出てきた涙を拭い、
「うん、わかってる。そうしよう、明日もみんなでご飯食べよう」
そして、不意に俺の頬に柔らかいものが触れた。
「お、お……おい」
「ん？」
「な、何の行為だ？」
「さあ。私にもわからないけど。なんかしたくなっちゃって」
舌を出して笑うリニア。何故か急に顔が熱くなってきた。別に初めてというわけでもない

が、こんな感覚は久しぶりだ。

――その時だった。背後に視線を感じた。いや、視線というには生ぬるいような……

「か、奏。あ……いや、これはその」

言葉が上手く紡げない。というか、何で俺はこんな言い訳じみたことを言ってるんだ。

「……」

奏は黙って俺を見つめている。

感じる。これは間違いなく怒っている。

「あの……奏さん？」

「怪我しないで、無事に帰って来て。話は後で聞くから」

言い終わるや否や、奏は物凄い音を立ててドアを閉めた。あっけに取られる俺を尻目に、リニアは肩を震わせて笑っている。

「大事なお姫様が嫉妬に駆られてしまいましたな」

「うるさい。何が嫉妬だ。大体……いや、何でもない」

「大体？」

「いいから行くぞ」

＊＊＊

ハンス・ブリーゲルに再びエージェントから連絡があったのは、あの衝突から五、六時間後のことだった。普段よりも仕事が遅いことに対し、上層部から何かしら催促があるだろうと予測していたため、特に焦った様子もない。ハンスは周囲を見回し、誰もいないことを確認すると電話に出た。彼の予測通り、内容はリニア・イベリン暗殺の件。何故すぐに処理しなかったのかと。自身の主人の仲介役である、このエージェントの様子は電話越しにも分かるほど彼に疑念的な感情を向けていた。そもそも催促の連絡がかかってくる時点で、ハンスは協会から疑われているようなものだ。

「しかし、やはり何かおかしい」

ハンスは顎に手を当てて考え込む。

―そもそもリニア・イベリンの処理に何故私が？血縁ではないものの、私が彼女の面倒を見ていたことは協会も知っているはず。仕事のスピードが落ちる可能性も少なからず予想できたはずだ。彼女の処理を優先するならば、私より腕の立つ者は協会にまだまだいるではないか。

しばらくすると、ハンスは仕事の準備を始めた。考えることをやめたのではない、ただ彼は指示されたことをするだけだ。主の命令は絶対。それが正しいことであれ、正しくないことであれ。この生き方こそが彼の性格には合っている。

「まあ。人を処理することは正しい事とは言えませんが」

ハンスは、静かに口角を上げる。どうやら心的な余裕は充分にあるようだ。

ふと、彼は何かに思い至ったかのように目を見開いた。
「そうか……なるほど」
彼の頭の中に、ある考えが浮かんだ。
「やれやれ、本当に上層部は性質が悪い」
一人で納得したハンスはもう一つの考え事をする。それは、自身の行動云々ではなく「研究所」についてだ。偵察に来ていた研究所の尖兵。ハンスが最後にようやく気付いた程の実力の持ち主。約三年間、大人しくはしていたものの研究所は力を蓄えていたと思われる。そろそろ何かを仕掛けるのではないか。そうなると、研究所との全面戦争は避けられない。つまり再び三つの勢力がぶつかり合う日も遠くないのではないか。

予想される事態に、ハンスは眉間の皺を寄せる。そして一息吐くと、腕時計を確認した。約束の時間だ。
「死ぬか、生きるか」
腕時計を見つめたまましばらく感慨にふけっていたが、やがて覚悟を決めたのかハンスは立ちあがった。そして衣擦れの音すらも立てず、彼は動き出した。

＊＊＊

「寒い……」
外に出て最初に思ったことがこれだ。昨日より寒い気がする。それとも緊張しているせい

だろうか。

―三時間前。
「出せ」
「何を？」
俺の覚悟とは裏腹に、先生は気の抜けた返事を返してきた。
「今回の相手は強すぎる。少なくともリニアをフォローできるぐらいの装備が欲しい」
「それで？」
「……三年前に使ったやつ。全部出してくれ」
すると、先生はやっと表情を変えた。
「あら、あれを再び使うっていうの？」
「仕方がないからな」
先生はしばらく俺の顔を眺めた後、どこか嬉しそうに笑いだした。
「驚いたわ。二度とあんなこと体験したくないって言ってたのに。自分から言い出すなんて。非日常とは縁を切ったんじゃないの？」
先生の挑発に自然と笑みがこぼれる。
「あんた……俺が誰だか忘れたのか。常識だとか非常識だとか、ましてや日常だとか非日常だとか、そんなもん今はクソくらえだ。友人が困っているならただ助けてやる!!それが鈴木聡太ってやつだ」

俺の言葉を聞き届けると、先生は近くにある鞄を取り出し、俺に投げかけた。
「あ、危ないだろ」
「大丈夫、大丈夫」
そう言いながら、先生は俺の方をじっと見てきた。
「な、なんだよ」
「いやいや、装備出せとか言っときながら、既にいっぱい付けてるじゃない」
正直、彼女は初めから分かっていただろうが、いざ指摘されると気恥ずかしくなる。俺は先生の言葉を無視して、鞄から装備を取り出した。
懐かしい。前につけていたやつだ。
もう二度と目にすることはないだろうと思っていた装備を、俺は一つ一つ付けていく。苦痛を最小限に抑えられるガード、愛用していたナイフ、ワイヤーに、表面に鋭い刃がある手袋。銃器類は……。
「ここまで重装備じゃなくてもいいか」
「どうして？」
俺の様子を横から見ていた先生は、不思議そうに尋ねる。
「だって今回は前みたいに世界の危機じゃないからさ。ただの内輪もめに巻き込まれただけだろ」
「さっきと言ってること違くない？」
「これはただの個人的な感想」

納得いかない顔で俺を見る先生。適当に会話を流すことしかできない。俺自身、本当の理由を答えていいのか分からないからだ。

＊＊＊

ついに約束の時間になった。今からおれたちは命のやり取りをする。最悪だ、最悪の気分だ。でもどこか高揚感のようなものも感じる。

「まるで映画みたいだな」

「となると、主人公は私たちね。今はクライマックスかしら」

リニアと雑談をしながら、昨日の場所に向かう。俺たちは静まり返った夜の道を揃って歩いていく。虫の鳴き声ひとつ聞こえない。誰もいない公園やぼんやりと光る街灯を見ていると、とても不安になってきた。

明らかに昨日と同じ道なのに、覚悟ができているだけでこんなにも違ってくるものなのか。まるで知らない街を行く当てもなく歩いている気分だ。

―いや、俺たちには目的がある。

目の前の暗闇にぼんやりと浮かぶ影が見えた。身動きもせず闇に溶け込む男。ハンス・ブリーゲルだ。

「ハンス!!」

男とは正反対にリニアは笑顔で、腕を大きく広げて話しかける。演技が入っているかのような素振りだ。ハンスは黙ってリニアを眺め、小さく彼女の名前を呟く。
「リニア・イベリン」
すると彼の呼び掛けに答えるようにリニアは一歩前に出た。
「そう、私はリニア・イベリン。そして私は生きるためにこの場にいる。ハンス、ハンス・ブリーゲルが生きてみろと言ったから。私は生きるために、あなたに認めてもらうために、死ぬわけにはいかない」

リニアが腰を低くして、戦闘態勢に入った。俺もサポートをする準備をする。
先に動いたのはリニアだった。勢いよく振り上げた彼女の脚は、ハンスの顎を見事に蹴りあげた。そして、その足はそのままハンスの腹部に入り、彼は後方へ飛ばされた。
しかし、とっさに受け身をとった彼は、大してダメージを食らっていないようである。
「ありゃ、全く効いてない」
舌を出して、振り返るリニア。お前も全く緊張感ないな。
「仕方ない」
俺は舌打ちをしながら、服の中に忍ばせておいたナイフを一つ投げた。狙いはハンスではなく、リニアの足元。地面だ。これは一種のバフみたいなもの、これでリニアも多少は戦いやすくなるだろう。
「ほう……やはり準備をしてきましたか。刃に文字を入れれば、魔法が無効化される可能性は減るということですね」

ハンスは俺の作戦を予測していたのか、驚く素振りを見せることなく淡々と分析をしている。その隙を狙い、リニアが再び先手を仕掛けた。拳を突き立てる。今回は上手く懐に入ったはずだ。
それでもハンスはびくともしない。涼しい顔で俺たちを見返してきた。リニアはすぐに後方へ身体を抜いた後、今まで以上の速度で距離を縮める。そして彼の脇腹を一発、二発。重たい蹴りを入れた。

しかし、未だにハンスの表情は崩れることがなかった。彼はそのまま懐から短剣を取り出し、俺と同じように自身の近くにそれを刺した。
「武器に文字を入れて魔法を使う。これを考案したのは私が最初のはずだったが……一体、誰が教えてくれたのですか？一人で考えたというなら、君には素晴らしい才能がありますよ」
短剣が光を放ち始めた。それと同時にハンスは戦闘態勢に入る。守りに入っていたさっきまでとは違う、明らかに攻撃の姿勢。
「これが本物ですよ」
ハンスが俺をめがけて一直線に走りだす。反射的に俺もあらかじめ文字が書かれている紙を取り出した。これで少なくとも十秒は持つだろう。無意識の内に俺は拳を握りしめていた。
三年前を思い出す。

―あの記憶を、あの経験を。

―そう、経験は武器になる。

魔法で強化した俺の身体は、精一杯ハンスの動きについていく。もって十秒。その間に一つでも攻撃を受けてしまったら、その苦痛はこの十秒が終わると全て俺に帰ってくる。受けたら最後、俺の身体は倒れてしまうだろう。

熱風が通り過ぎるかのような攻撃。かろうじて右によけた後、俺は身をかがめて紙を地面に張り付けた。そしてそのまま、ごろごろと回転しながらそこら中に紙を張り付ける。ハンスは俺を追うことなく、地面の紙を見ていた。

瞬間、リニアが彼に向かっていく。彼の注意がリニアに向かった所で、俺はポケットからワイヤーと紙を取り出した。

「ほう、そのワイヤー。Chaserの遺品か」

ハンスの言葉に構うことなく、俺は彼に向けて紙を投げた。先ほど張り付けた紙も効果を使える頃合、逃げ道はないはずだ。

これなら―、勝てる!!

希望が見えたと思った。

しかし、ハンスはこちらの攻撃を見越して素早く前に飛び出た。俺は咄嗟に地面に刺したナイフを投げるが、彼は躊躇うことなく左手でナイフを受け止め、そのまま俺に向かって投げ返してきた。
既にバフ時間が終わった俺の身体は避けられない。幸か不幸か、身体に巻いていたプロテクターのおかげで深く刺さることはなかったが、痛みが傷口から登ってくる。
俺は喉から出そうになる苦痛を押し殺した。視界がぼやけ、眠気が襲う。魔法を使おうと思っても集中できない。リニアが不安そうに俺を見てきた。
「だ、大丈夫だ、俺はまだ……」

―まだ倒れるわけにはいかない!!

やっとの思いで身体を起こすと、俺はリニアに向かって紙を投げた。
相変わらず恐ろしい速度で相対している二人だが、お互いに冷や汗が出てきたようだ。
「お嬢さん、先ほどの蹴りは少しダメージがありましたよ。あちらの青年の苦痛とは比べ物にもなりませんが」
「そうね、だから何なのよ」
淡々と話すハンスに彼女も苛立ちを見せているようだ。
「お互い、魔法を使わない状態で体術だけで戦うには、この程度がそろそろ限界です」
「そんなこと私もわかっている」

「はい、では決着をつける方法もお分かりですね」
「魔法で終わらせなければならない」
ハンスは小さく頷き肯定した。
「なによ、以前あなたが教えたことと違うけど？」
「状況が状況ですから」
リニアは戦闘態勢を解いて、ため息をついた。
「いい加減、上層部の意図を教えてくれないかな？」
「それは難しいですね、仕事ですから」
「仕事仕事って……」
うんざりした顔でハンスを見返すリニア。

すると、ハンスも腕を下ろしてじっと彼女を見据えた。
「お嬢さんは……お嬢さんは何のために戦っているのですか？」
「私？」
「はい、少なくともお嬢さんがあのような行動されていなかったら、こんなことにはなりませんでした」
「そうね」
「どうしてこのような状況を作ってしまったのですか？」
「さあ」
リニアは芝居がかかったように首を傾げた。そして、ゆっくりと瞬きをして続けた。

「私が正しいと信じたから。だから私はそうした。後悔なんてしない。友達のために、大切な人のために人間は生きていくと思ったから……。世界中の人を助けることは無理でも、周りの人たち位は私にも助けられると思う。そしたらなんか良いことありそうでしょ」
「良いこと……」
何度も彼女から聞いていた言葉だったのか、あるいは楽観論にうんざりしたのか、ハンスは怪訝そうな顔でリニアを見ていた。
「そうですね、全て上手くいったならそれは正しいと言えるでしょう」
「それに私は満足してる。ハンスから離れたこの五年間、色々あったけど良いことばっかりだったよ」
霞む視界の中でも、たとえ彼女の後ろ姿しか見えなくても、リニアのあの眩しい笑顔が思い浮かぶ。
堂々とした楽観論といい……あいつらしい。
駄目だな、こんなとこで寝ていられない。
俺は根性で立ちあがろうとした。まず足に力を込めることに集中し、次に腕、手……。
ふと、手のひらにワイヤーが握られていることに気付いた。
―これが最後のチャンスか。
俺はワイヤーを見つめ、その先のハンスに意識を集中させた。

そしてー、

「良いこと、あるに決まってるだろ!!」

「っ!!」

叫びながら俺はハンスに向かってワイヤーを投げた。それと同時に、先ほどの魔法を発動する。紙の文字は全て『止まれ』だ。

発動時間は少ないが、あれだけの量。彼の地面は紙の海となっている。おかげで俺の投げたワイヤーは確かに、魔法で動けない彼の腕を捉えた。そしてリニアが彼にむかい、静かに歩きだす。

「魔法を使うって、こういうことでしょ？」

「小さな魔法も重ねれば威力が増す。そしてこのワイヤーは特別製。見事ですね」

「唯一持ってる研究所の代物だ。大魔法使い専用兵器、三年前にもらったものを使うことになるとは俺も思わなかったがな。俺はサポート役、あんたを止めればいいだけ。リニア、後は任せたぞ」

苦痛に耐えられず、背中を壁に預けたまま俺はリニアの背中をただ見つめる。彼女はたくさんの紙をハンスに投げた。巨大な雷に炎を起こした後、最後に彼女はハンスに向かって拳を突き立てた。

「魔法使いを倒す最善の方法は、魔法を使わないことってね。私は最後、拳で終えたわ」
全ての攻撃をまともに食らったおかげか、ついに絶対に倒れることがないと思っていた男が膝をついた。
「成程……このような作戦があったとは」
「正攻法ではあなたを倒すことは無理だからね」

ハンスは荒い呼吸を繰り返しながら、俺をじっと見つめた。
「これから……どうするのですか？あなたには、研究所から……尖兵が」
「まあ、どうにかなるんじゃないか」
ハンスはしばらく黙ったまま何かを考えていた。そして、傷ついた身体をゆっくりと起こした。どうやらリニアの勝利で決着はついたようだ。
「さてと……俺はもう家に帰っていいのか？」

やれやれと言った様子で俺は息をついた。一方、気づくと彼女は笑顔でハンスへと駆け寄っていた。
「ねえ、ハンスも一緒にお家帰ってご飯食べない？」
おそらく俺もハンスもあっけにとられた表情をしているに違いない。
「お前……さっきまで命がけで戦ってた相手に何を」
「いいの！ 仕事はもう終わったでしょ」
俺たちのやり取りをハンスは静かに見守っていた。そんな彼に気付いたリニアがもう一度

ハンスに手を伸ばす。
「ハンス! 一緒にご飯食べよ」
「……いいのですか？」
「当たり前でしょ、ハンスは家族だもん」
ハンスは彼女の手をしっかりと握りしめた。
そうだな、やっぱりこれは家族喧嘩だったな。
「とにかく早く帰ろうぜ」

――その時だった。

ハンスが勢いよく俺たち二人を後方へ追いやった。何者かが突然、彼の前に現れたのだ。
「こんにちは」
少女だ。
「お前は……確か昨日会ったよな？」
「研究所の尖兵だ」
俺の疑問をハンスは一蹴した。少女はそんなやり取りを見てか、くすくすと笑いだす。
「私の名前はノエル。リニア・イベリンの監視が目的だったけど、私の上司が彼女を処理すればもっと私を評価してくれるっていうから」
少女は拳銃を取り出すと、何のためらいも無くリニアに向かって発砲した。しかし、間一

髪のところで銃弾はハンスが短剣で弾いたことにより壁に逸れた。
「予想通りだな。戦いの後に現れるとは思っていたが、まさかこのように露骨的に来るとはな。お前は子供か？ それとも改造人間か？」
彼は先ほどの戦闘時以上の早さで少女に接近した。やはりリニアとの勝負では多少の手加減をしていたのか。
「生半可だな。身を隠すのは上手いが、他は中途半端というわけか」
ハンスは後方へ回避しようとする少女の腕を掴んだ。
「遅い」
そして少女の手首をあらぬ方向へと曲げた。少女の悲鳴が響き渡る。思わず耳を塞いでしまいたくなるような悲痛の叫びだ。

『ハンス・ブリーゲルは後始末を専門とする』
この言葉の意味がどういうことか改めて理解した。彼は少女の片方の腕に短剣を刺した、そして少女に悲鳴を上げさせる暇もないまま別の個所を刺す。俺が口を挟む間もなく、次々と刺し続けるハンス。そして最期に壁に投げ捨てられた少女は、悲鳴をあげる気力もないのか壁にもたれかかっていた。
「背後にいるのは誰だ。ロベルトか、ゴトーか？ ルイーゼは死んだはず、フーゴはまだ生きているのか？」
ハンスの尋問に対し、少女は何も答えぬまま俯いている。
「知っていることを話せ」

彼は少女の首元を掴んで持ち上げた
「や……やめろ! まだ子供だろ、何してんだ、あんた!!」
「これは人間ではありません、人間のように見える人工生命体。詳しい技術は分かりませんが、三年前に研究所が作り上げたものです。そしてこれらは我々の敵です。容姿で判断してはなりません」
「けど……見ていて気持ちがいいものじゃない」

すると、ハンスは鋭く反論をした。
「こいつはあなた方に向かって発砲した。要するに君は死ぬ可能性があった。更に今のこいつは、おそらく上司から制約がかかっている状態。いきなり殺しにかかるものに慈悲をかけろと?」
「それは……」
彼の言っていることは正論だ。ちらりと少女の様子を窺う。すると少女は怒りの籠った瞳で、まっすぐとハンスを睨んでいた。その表情はどこか嫌な予感がする。俺の頬をじわりと、冷や汗が頬を流れた。
次の瞬間、少女はひとり呟く。

「私の趣味は―、

爆弾設置だよ」

突如、大きな爆発音と共に周辺の木々が倒れ始めた。初めてハンスの顔に動揺が現れた。そして俺たちへと振り返る。俺もリニアも傷を負っており、倒れてくる木を避けることは不可能だった。

「ハンス・ブリーゲルと戦うというのに、何も準備をしてこないわけないだろ」

形勢逆転した少女は笑みを浮かべていた。そして傍に落ちていた拳銃を拾い、リニアへと照準を合わせる。

「さようなら」

「リニアっ!!」

俺が伸ばした手は彼女まで届かなかった。

一発の銃声が響き渡る。

その透き通った音は、ずっと俺の耳の中で木霊していた。

「おい……!!」

口から自然と言葉が零れた。大量の血が道路に流れ落ちている。

この血は……

「―ハンス!!」

彼女の悲鳴にも似た叫びが聞こえる。ハンスはかろうじてリニアを庇ったものの、銃弾が

肩を貫通していた。
「この出血の量……やばいぞ!!」
「ハンス!しっかりして、ハンス!!」
急いで駆け寄るが彼の瞳は虚ろとしている。息はまだしているようだが、重症には違いない。
「あら……ハンス・ブリーゲルに当たっちゃった。どうしよう……ええと。とりあえずもう一発撃つね」
少女は笑顔で再び拳銃を構える。
「させるかっ!!」

少女が引き金を引く直前、俺は勢いよく少女に向けてワイヤーを投げた。見事に命中し、拳銃は少女の手元からはじけ飛んだ。
「あーあ。あと……ちょっと、だったのに……な」
力尽きたのか、少女もその場で意識を失った。とりあえず勝負はついたみたいだ。
「ハンス!!」
視線を戻すと、リニアは肩を震わせて彼の手を握りしめていた。
「ハンス……何で私なんか庇って……」
すると、ハンスは消え入るような声で彼女へと笑いかけた。
「娘を……守ることに、理由なんて……要りませんよ」
「ハンス……」

「大丈夫ですよ、お嬢さん。私は……こんなところで、死にやしません」
言葉とは裏腹に、ハンスの呼吸は先ほどより荒くなっていた。出血も未だに止まらない。
「早く手当てを……」
「お嬢さん……気をつけてください」

彼の忠告にリニアはすぐに正面を見据えた。釣られて俺も前を見る。
暗がりにすらりとした美青年が立っていた。いや、ただの美青年ではない。彼はその外見に似合わず、口元に長い髭を生やしていた。それがどこか不気味な雰囲気を醸し出している。青年は俺たちに構うことなく、気絶した少女を両手で抱え上げ、ため息を零した。
「やれやれ……ここまで実績に執着するとは。まあ、少なくとも評価できる部分もあるか」
青年の視線は少女からハンスへと向けられた。
「久しぶりだな」
「貴様が……背後だったか」
すると、青年は心外そうに口を尖らせて答えた。
「それはちょっと違うな。私が下した命令は監視だけ。部下が勝手に突っ走っただけだ、でもここは謝罪をしとこう」
「喧嘩を売っているのか？」
「いや、今日はこれを回収しに来ただけだ」
そして青年は身を翻す。
「では、さようなら。リニア・イベリン、鈴木聡太。今度会う時は楽しく遊ぼう。期待し

ているよ」
そう言い残すと、青年は闇に溶け込むように消えていった。

＊＊＊

その後はかなり大変だった。ハンスを普通の病院に連れていくこともできず、急いで先生の元まで彼を運び、幼稚園で手当てをしてもらった。幸いにも一命はとりとめ、体内にも銃弾の破片は残っていなかった。ただ弾丸事態に刻まれた魔法がかなり強力だったのと、やけどの跡がひどいこともあり、回復にはだいぶ時間がかかった。通常の治りの速度より二、三倍早いこちらの治療技術でも、ハンスの傷が癒えるまでには三日もかかった。

三日後、俺ならあの傷から完全回復には五日はかかりそうだというのに、ハンスは既に回復を終え、本国・魔法協会へと戻るようだ。体調のこともあり、リニアは不安そうに彼を見ていた。
「もう帰るの？」
「これも仕事です。定期報告をしなければなりません」
「そっか」
あからさまに落ち込む彼女をしばらく眺めた後、ハンスは言葉を選ぶようにゆっくりと口を開いた。
「おそらく。私の推測なんですが、上層部の『リニア・イベリンを処理しろ』という命令

は何らかの偽装工作だと思います。研究所の動向を見るための作戦かと。それだと私が派遣された理由も納得がいきますし」
「なるほどね」
リニアは勘弁してくれという顔でため息をついた。隣で聞いていた俺も、呆れるしかない。そんな茶番のために俺たちは本気で戦ってたのか。
「おかげで成果は得られました。お嬢さんはこれからも自由にしていて大丈夫でしょう。しばらく我々協会側は、研究所を注視しなければならないので」
彼女は少し不服そうな顔でハンスを見ていた。
「まるで私なんか、どうでもいいみたいな……」
「お嬢さん、そんな顔をしないでください。私も娘が五年間でどれほど強くなったか試してみたかったのです。この先研究所に狙われる回数も増えるでしょう。ある程度の実力がないと生き残れませんから。敵に殺される位なら私が安らかに送ろうと判断した結果です。これも愛しい愛娘への愛情表現ですよ。娘の成長を見守ることは親の義務であり、楽しみでもありますから」
「さらっと恐ろしい冗談を交えてくるあたり、あんたの体調は万全のようだな」
優しい微笑みのような悪魔の頬笑みのような、どちらとも取れる笑いを残してハンスは玄関へと向かった。その背中を見送りながら、リニアは自信たっぷりに声を投げかけた。
「ハンス、次会う時には手加減抜きだからね」
「はい。それでは失礼いたします。キルヘン、あなたにもお世話になりました。ありがと

うございます」
「はいはーい」
扉が閉まっても、しばらく俺は動けなかった。

―キルヘン？

「あ、それ私の名前よ」
俺はよっぽど不思議そうな顔を浮かべていたのだろう、先生は事もなげに答えた。
「何だよ、名前あったのか」
「当たり前でしょ」
「それもそうか。ところで、先生はどこまで知ってたんだ？」
「まあ、なんとなく。勘かな」
雑誌を読みながら返事をする先生。この件ばかりは適当に答えられるわけにはいかない。
「ちゃんと答えてくれ、俺だけ何も分からない状態で苦労するのはもう御免だ」
すると先生は憐れみにも似たような瞳で俺を見てきた。
「もう終わったことなんだから……ハッピーエンドだったからいいじゃない!!」
「これは俺が欲しかったハッピーエンドじゃない!!」
俺は思わず頭を抱えて叫んでしまった。

ハンス・ブリーゲルが帰国後、俺たちには再び日常が戻ってきた。もちろんリニアが追加された日常だ。何の間違いか、俺の足は自然と幼稚園へと向かっていた。そして、気が触れたのか自ら幼稚園の玄関を開ける始末。

「あれ？　そうちゃん、どうしたの？」

驚いた顔のリニアを見て、やっと我に帰るが俺の口は勝手に本音を告げていた。

「い……一緒にご飯食べようって約束したろ」

「ああ、あれ本気だったんだ？」

「あたりまえだろ」

「そっか……そっか!!」

リニアは何が嬉しいのか、いつもよりきつく俺の身体を抱きしめてきた。まあ、そこまで嫌ではないか。俺は彼女の笑顔を見て、そう思った。

今回の事件。協会と研究所の争いが始まりかけている証拠だ。

これではまるで―、

「Retrace…というか」

Track2 Retrace end.-